
資料紹介

通俗読物編刊社の出版物

—1930年代の抗日パンフレット 11種—

小倉芳彦

目 次

序	63
解 題	67
訳 文	74
原 文	86

序

ここに紹介するのは、通俗読物編刊社出版の冊子9種と、その前身に当る北平三戸書社出版の同型の冊子2種、計11種である。

通俗読物編刊社、およびそこから発行された通俗読物について知ったのは、野原四郎氏が自著『アジアの歴史と思想』(1966年)の解説で、次のように述べているのを読んだのが最初である。

顧頡剛は、1931年の満州侵略によって日本の中国侵略が開始されて以来、五・三〇事件のときの経験にもとづいて、仲間をさそって通俗読物編刊社を組織し、大鼓詞(しんない?)や小調(端歌)の形式を使って異民族の侵略に抵抗した物語を謡い物にし、抗日宣伝工作につとめてきたが、『学術』停刊後まもなく上海方面を離れてからも、重慶、成都へと転々しながら編刊社の仕事をつづけ、最後に資金に困って停止するまでには六百種の通俗読物を五千万部出版した。(同書 p.242)

このうち“『学術』停刊後まもなく上海方面を離れてからも”という叙述が誤りで⁽¹⁾、1937~38年にかけての顧頡剛氏は、甘肅南西部を中心に「西北考察」の旅を続け、その後昆明、成都、重慶を転々としていたことについては、本研究報告 No. 15『西北考察日記』によって紹介した通りである。六百種、五千万部という数字は、その中に蘭州で発行した老百姓社の刊行物もあるい

- (1) この“誤り”に関する経緯をまとめておく。七・七事変後、顧頡剛氏が上海に移り、一時『学術』という雑誌を発行していたがまもなく停刊した、という観測記事を書いた最初は竹内好氏であろう(『顧頡剛と回教徒問題』『回教園』5巻3号、1941年)、『学術』は上海福州路384弄4号の学術社発行で、発行人は邵禮、編輯人は汪叢泉。民国29(1940)年2月に第1輯、5月に第4輯を出して停刊となっている。顧頡剛名儀の論文は、第1輯に「蘇禹與堯舜的關係是如何來的?」、第3輯に「春秋時代的農民生活與商工業」および「中国封建社会的組織與其動搖」、第4輯に「春秋時代的男女關係與婚姻習慣」の計4篇が載っているが、どれも5~6ページの短篇である。第3輯の「編後」には“顧頡剛先生關於春秋史的論文、凡十篇、是連貫的而同時独立的、這一輯中刊載了兩篇。”という「編者」の語もあり、竹内氏はこれによって上記のように理解したのである。

ところがこの『学術』誌を、当時成都に在った顧頡剛氏はまもなく手にしたらしく、顧氏の主宰する齊魯大学国学研究所で出版している『賁善半月刊』第1巻第3期(1940年4月16日発行)に、「顧頡剛啓事」というカコミ記事を書いて、“『学術』第1輯中にある顧頡剛署名の「蘇禹與堯舜的關係是如何來的?」の一文は自分の執筆したものではない、編者の汪叢泉なる人物を自分は知らない、他の文章も同じ”と宣明した。私がこの「啓事」の存在を知ったのは、龍門書店の『賁善』再版本(1965年)を繙閲していた際のこと、このことを早速野原氏に知らせたところ、氏から“(顧氏と『学術』の関係が)そんなことであつたのかと、びっくりしています”という返書(1978年4月21日)を受け取った(『野原さんとの往復書簡』『响沫集』3参照)。

私が「顧頡剛と日本」(『理想』464号、1972年、『吾レ龍門ニ在リ矣』所収)を書いた時点では、まだこの「啓事」の存在を知らず、竹内氏およびそれに準拠した野原氏の叙述に従って、一時上海にいたらしとしておいた。この一文は本文で後述するようにその後、令嬢顧洪女士の翻訳を通じて顧頡剛氏の眼に触れる機会を得たが、令嬢代筆の書信で次のように強調されていたことを附記しておく。

……另外、在繙訳中也發現了一些問題、主要是芦溝橋事變後我父親的去向。實際上他并没去上海、是由北京到了西北、而後又轉入西南。文中根據 1937—1940 年發行的《学術》雜誌、断定他當時的行踪。此雜誌刊登署名“顧頡剛”的文章《蘇禹與堯舜的關係如何》實系他人偽造。40 年我父親就此事發表了啓事、載在《賁善》第一卷第三期(民國二十九年四月)、申明《学術》所載論文非他本人所寫。關於啓事的内容、此處就不詳写了、希望屆時能够面談一切。(1980年8月4日)

実際にはこの書信を受け取る半年以上前に、私は顧頡剛氏に宛てて、『賁善』第一巻第三期の「啓事」を読んで、『学術』誌上に載った顧氏名儀の論文が自作でないことを知った旨を書き送っているのだが(1979年12月14日)、あらためて注意を喚起された次第である。

は含まれているかもしれない。

野原氏の挙げたこの数字は、おそらく顧頡剛氏が1948年に書いた「我的事業苦悶」（『観察』週刊、第3巻24期）にもとづくものと思われる。この一文は当時いちはやく「顧頡剛の戦時工作」と題して、『中国研究所所報』15号（1948年7月31日発行）に訳載されている。その内容は抗戦中の顧氏の行動を氏自ら証言しているものであり、さきに紹介した『西北考察日記』と相補いあう部分がある。今回、通俗読物数種を紹介するに当たっても、この顧氏の一文は重要な参考になると思われるので、中国研究所の御好意により、『所報』掲載の訳文——訳者はおそらく野原四郎氏であろう——を明らかな誤字は一部修正して（〔 〕内は小倉補）、全文転載させていただくことにした。記して感謝の辞に代える。

顧頡剛の戦時工作

——「我的事業苦悶」『観察』週刊 第3巻第24期

歴史学者顧頡剛は、本年〔1948年〕一月、国立中央研究院の社会科学研究所における講演で、かれ自身の仕事を

- (一) 国故整理工作
- (二) 民間文学と民衆教育工作
- (三) 辺境地方開発工作

の三つにわけ、戦後の国内情勢の不安定のために、この三つとも大きな打撃をこうむっている、と述べた。かれは余生を三方面の工作のためにささげる決意だが、種々の政治的、経済的障碍は、ますます工作の進行を困難にするのではないかとおもう、と述べて、このすぐれた学者の卒直な苦悶の告白は若い研究者たちに強いショックをあたえた。

顧頡剛はその講演において、戦争勃発以来のかれの民衆教育工作と、辺境開発工作进行を回顧した。『古史弁自序』の読者は、かれの国故整理工作についての足あとを知ることができるが、抗戦期におけるかれの努力を、この講演はつたえてくれる。

かれは、次ぎのように述べている。

《1. 民間文学と民衆教育工作》

九・一八の勃発によって、北平各校には抗日救国会の組織が成立した。自分の属する燕京大学抗日救国〔会〕に参加して、宣伝工作に従事した。

だいたい民衆宣伝をおこなうにあたっては必ず民間のコトバを用いなければならぬことを私は早くから体得していた。すでに北京大学にいた当時、『歌謡週刊』を編集していたときの経験から、私はそれを学んだのだが、一九三五年、五・三〇事件のとき、民間におこなわれている大鼓詞の形式を採用して千首の傷心歌をつくって、これをひろめたところ、忽ちこれが流布され、いたるところの街頭でうたわれ、塙や門などにその文句が民衆の手で記されるのを見かける、という流行ぶりをしめた。この一事によって私は、人民自身のコトバであれば、必ず彼等に歓迎されるという貴重な教訓を得た。

抗日宣伝工作にあたって、私はこの経験を生かして、民間文学の旧形式のなかから大鼓詞をえらんだ。大鼓詞は、ただ二人の人間が一しょにうたえばいいのであって、話劇や

歌詠のように多数を動員しなくてもすむから、この簡単な形式が民間に深く入って行く大切な条件だからだ。私は新聞紙上で大鼓詞を一般から募集すると同時に、いくらかの題目をかかげた。そのうちの一つに『一・二八、抗日の車夫胡二毛、黄浦江に跳びこむ』というのがあった。われわれは、五千部を印刷したが、数日中にこれが全部売り切れてしまった。そこで次ぎ次ぎに増刷したが、各書店は、あらそってこの抗日のうたを販売する有様であった。

当時、私は特に、大鼓詞の巧みな唱い手である一人の盲^(マ)を招いて、できあがった作品を一ツツ印刷にかかる前に、こころみにまず彼にうたってもらい、どの文句が通俗的でないか、また、どの字がうたいにくいかをきき、彼の意見を参考にして私は作品に訂正をくわえた。改定を経てから、その盲人が、宣伝工作を担当する青年たちにうたいかたをおしえる。青年たちは、充分にうたいこなせるようになってから、民間宣伝の工作を開始するため民衆のなかへ入ってゆく。このようにして、われわれの新しい内容をもりこんだ大鼓詞がひろく深くつたわっていたのである。

目に一丁字のない郷村の農民にたいして、もっとも効果的な宣伝方式は、図画である。郷村では、毎年の年越しには『楊柳青』と称する□*の画を貼るならわしがある。そこでわれわれは、大きな効果をあげた。

これらの工作は、当時すべて『通俗読物編刊社』の手でおこなわれた。工作力がきわめて大きかったため、日本人はこれをひどくきらっていた。日本側は一再ならず、冀察政務委員会に抗議した。日本側が政務委員会に交附した抗日分子のリストのなかには、私の名も主要人物として加えられていた。何応欽が委員会の長であったときには、日本の要求を入れてしばしばわれわれを圧迫した。しかし宋哲元は放任主義をとった。というのは、われわれが二十九軍の長城線における抗戦を題材として『宋哲元の喜峰口の大戦』という鼓詞をつくったとき、これが二十九軍の兵士のあいだで非常に流行し、宋哲元自身も、兵士あがりのことであり、こうした通俗読物を大いによろこんだのである。かれは、われわれの『通俗読物編刊社』を公然と援助することはできなかったので、私を委員会の顧問に招聘し、毎月二千元を支給し、事実上、われわれの仕事を援助した。われわれは、平均毎月八種の通俗読物を出した。郷村の私塾の先生や小学教師の手によって、各地の学生や農民のあいだにそれはひろまっていった。

この工作は、七・七勃発まで継続された。全面抗戦となるにともなって、編刊社は各地を転々とし、最後に成都に移ったが、物価騰貴その他の事情のため、停刊のやむなきにいたった。前後をつうじ、われわれの出版した通俗読物は六百種、五千万部にのぼった。

抗戦勝利後、上海にかえり、『民衆周刊』を発行したが、売行きはかんばしくない。われわれは、上海の人々はこのような国語^(マ)の読物はあまり好まないのだろうとおもった。そこで北平で発売した。ところが、われわれの馴染みの土地である北平でも売れ行きがよくない。何故であろう。人民が、貧窮に落ちこんでいるのだ。戦前なら、なんの苦勞もなく一、二の小銭で買うことのできた大鼓書が、今では少くとも五千元は払わなければ買えないのだ。

私の民間文学と民衆教育の仕事も、大きな困難にぶつかっている。

* 原載誌一字分空格。

(2. 辺境開発工作)

私は、蒙古・甘肅・青海・寧夏・綏遠・西藏の各辺境地方に赴いて、辺境各族の中央にたいする観念を観察した経験をもっている。

一九三七年、私は陶孟和先生と、中英庚款董事会の補助によって西北地方の視察に出かけ、あの地方で一年間すごした。私は、一般の中央からの派遣員のように彼らから羊皮や狐皮を徴集することもしなければ、商人のようにウソをついたりしなかった。彼等は、しだいに私を信頼するようになり、ついには私に向ってその窮状をうったえるのであった。彼等は、あたかも私が彼等を苦難から救い出すことのできる観世音であるかのようにみなした。私がどんな官職にあるのかも知らず、彼等は、さしだしてくる書類に『中央救苦大員』と書いてくるのであった。辺境の人民が、いかに安定した政治を切望しているかが、わかる。

もともと辺境の人民は、漢文を学ぼうとしなかった。彼等は、漢文を一種の宗教と考え、『漢教』は、彼等を消滅するためのものであると考えていたのである。私は彼等から信頼をうけているのを幸として、彼等がこの誤った考えから解放されるために、毎日少しずつ漢文を学ぶことをすすめた。彼等も、これをうけいれるようになった。また、私は、獣類に悪疫が流行しているのを知り、彼等が連合して、内地から獣医を招聘することを提案した。彼等はこれを実行した。彼等から搾取しようと思わず、彼等のために誠実に事の処理にあたれば、すべての辺境工作は順調に進展するのである。

ある人々は、西北開墾を主張しているが、実情は、西北は耕作には適さず牧畜が適しているのだ。ラマ文化は決して漢文化よりも低いということとはできない。ラマ廟の建築の壮麗さをもつてもいうことができるし、ラマの学問愛好の深さは、彼等が宗教研究ばかりでなく、天文、暦法、医学を研究していることにあらわれている。廟において、たえず討論会や弁論会がおこなわれ、一つの問題について徹底的に究めるために幾日でも討論がつづけられる。このような研究精神は、内地の大学においてさえ容易にもとめられないところだ。蒙古、西藏の文化についてわれわれは、認識をふかめる必要がある。われわれは、いかにして各族の特点を発展させ、いかにして欠点を消滅させて、真の『一家人』をつくりあげるかに努力しなければならぬ。

『中国研究所所報』第15号 (1948年7月31日発行)

解題

『西北考察日記』に記すところによると、通俗読物編刊社の同人は七・七事変以後、北平を離れて先ず帰綏（現フフホト）へ移り、ついで太原、西安、漢口をへて重慶へと5度転々とし、重慶で顧頡剛氏と再会している（1938年9月24日条）。中国大陸の各地に流布していた刊行物である通俗読物とは、いったいどのような体裁のものだったのか、私は多年知りたく思いつつも、それを実見する機会になかなか恵まれなかった⁽¹⁾。

本研究報告 No. 15 の「前言」で記したように、たまたま私は顧頡剛氏の『漢代學術史略』の訳書を刊行したことを機縁として、顧氏と連絡をとることが可能になり、さらに私の書いた「顧頡剛と日本」に眼を通してもらえたことがおそらく契機となって⁽²⁾、抗戦中の行動の一部を記した『西北考察日記』油印本を贈られるという幸運に恵まれた。やがてまもなく顧氏は逝去したが、その後『日記』の翻訳に関して、令嬢顧洪女士から種々教示を受けたことはさきに記した通りである。

顧洪女士との交信の中で、年来気になっている通俗読物の存否について問い合わせてみると、ごく一部なら残っているという。早速コピーを依頼したところ、種々の事情で郵送が大幅に遅れ、ようやく1982年4月になって、学术交流のため来日された史樹青氏を介して、そのコピーが私の手もとに届いたのである。それは全体で六百種といわれる中のほんの一部分に過ぎないが、もって全般を推す手がかりとはなるであろう。

入手できた計11種について概要を記す。版型はB6。版画風の表紙（コピーなので裏面に透写されたものから推察するしかない）、裏表紙（白紙）を除いて本文は7ページ。印刷のスタイルはそれぞれバラバラで、三戸書社出版の①②は石印版、他は活字だが、活字の大小、組み方などに統一は全くない。したがって7ページに収まっている分量もかなり差がある。

内容は末尾の原文について見ていただくとして、各冊の主題、形式などについて簡単に解説を加えておく。なお11種の中から、時期的に早く、かつ内容上で特色のある①③⑦の3冊を選び、見本として試訳してみた。通俗文芸について全く不案内な私なので、誤解も多いと思う。叱正をお願いする。

(1) 「通俗読物編刊社とその文芸運動」（『北海道大学文学部人文科学論集』第14号、1977年）を書かれた藤本幸三氏も、通俗読物の冊子そのものはまだ見ておられぬとのことであった。

(2) 私たちの訳書（『中国古代の學術と政治』大修館書店、1978年）の解説には、顧氏に関する日本語文献目録を附しておいたが、顧氏はこれに目を止めて、訳書を受け取った礼状の末尾に、「大著《顧頡剛と日本》、顧先生很想拝読、希望惠贈一冊、為荷」と記されていた（王煦華氏代筆、1979年11月22日）。そこで私は同論文を収めた拙著『吾レ龍門ニ在リ矣』（龍溪書舎、1974年）を顧氏宛てに郵送したのである。

翌1980年3月になって同書を入手した旨の礼状が届いたが（同じく王煦華氏代筆）、8月に入ると、こんどは令嬢顧洪女士から最初の書信があり、顧氏の近況を伝えるとともに、「顧頡剛と日本」の一文中の、第二、第三部分を彼女の手で中国語に翻訳中であること、9月に私が北京に行く予定らしいから、その折にわかりにくい箇所を教えてほしいこと、などが書き添えられていた。翻訳に関する質疑応答は、約束通り北京の旅舎の一室で一応果たすことができたが、その際この訳稿をすでに顧頡剛氏が読んで、「還是日本朋友理解我的心思啊」（やっぱり日本の友人は私の気持がわかってくれたね）と洩らされた旨を令嬢から伺った（その後女士からの書信にもそのことは再度触れてあった）。顧洪女士の訳稿「顧頡剛与日本」は、顧氏の死後になったが、『中国史研究 動態』1981-3 に掲載されている。

*① 『胡阿毛開車入黃浦』北平三戸書社出版

三戸書社については『顧頡剛先生主要學術活動年表』⁽¹⁾の1933年の項に、

参加燕京大学教職員学生抗日会、辦三戸書社、宣伝団結抗日、出版通俗讀物、後來發展為通俗讀物編刊社。

とあるように、通俗讀物編刊社の前身である。①の発行年月は明らかでないが、上記三戸書社の設立以後であることは言うまでもない。

本冊子は7ページの中に「胡阿毛開車入黃浦」のほか、「歎朝鮮」、「皇帝夢」の3篇を収める。いずれも大鼓^{ヂーグー}⁽²⁾の台本である。

「胡阿毛開車入黃浦」（胡阿毛、車を運転して黃浦江に跳びこむ）は、上掲の顧頡剛「我的事業苦悶」中に、“五千部を印刷したが、数日中にこれが全部売り切れてしまった”とある『一・二八、抗日の車夫胡二毛、黃浦江に跳びこむ』の大鼓詞に該当するに相違ない。1932年1月の上海事変以後、日本軍の占領下におかれた上海の街で、自動車運転手の胡阿毛が、日本軍將校3人を座席にのせたまま黃浦江に跳びこんで溺死させた愛国的行為を唱っている。多くの句が -ang 韻の語で終っており、大鼓特有の歯切れのよい調子が続いている。

「歎朝鮮」は、日本の植民地にされた朝鮮人民の悲惨な状況を綴って、わが中国も台湾・大連を失ったばかりか、最近では東北三省・熱河も朝鮮やインドと同様な地位に陥っていることを述べ、これを拱手傍観していると、将来「日賊」が迫ってから後悔しても間に合わぬぞ、と警告を発する。句末は -an 韻。

「皇帝夢」は、清朝最後の廢帝溥儀が、日本の謀略で皇帝にかつぎあげられたが、自ら日人の傀儡にすぎぬことを知らされて思い悩み、このままでは満洲国も滅ぼされるに相違ないと考え、ついに偽皇帝たるに甘んじきれぬと思い立つに至る。-ang 韻のいささか荘重な語り口的一篇である。

「小口大鼓」の「小口」はおそらく地名であろうが、未詳。なお標題番号の肩に*記号をつけたものは、日本語訳を試みた冊であることを示す。

② 『義軍女將姚瑞芳』北平三戸書社出版

①と同じく発行年月未詳。上海兩江女子中学を卒業した姚瑞芳は、読書作文など自由な日々を送っていたが、日本の東三省侵略以後、これを心痛し、たとえ女子でも救国の仕事に参加せねばと決意する。そして人の止めるのもきかずに、ある日上海から姿を消す。21歳の瑞芳がいなく

(1) 1980年12月25日に顧頡剛氏は逝去したが、葬儀の代りに「悼念顧頡剛先生學術報告会」が1981年1月23日、北京で開かれた。それへの準備として同學術報告会籌委会が作成したのが『顧頡剛先生主要學術活動年表』で、内容はB5判、計10ページの簡略なもの。私が手に入れたのはそのコピー版である。

(2) 『辞海』1979年版は「大鼓」について次のように説明している。曲芸（歌謡芸能）の一種。一人が鼓や板を打ちながら唱い、一人ないし数人が三弦等の樂器で伴奏する。一般には清代初期に山東、河北の農村で形成されたとするが、一説では大鼓はもと「鼓詞」とよばれたもので、鼓詞から變化してできたものともいう。主に北方の省や市で流行したが、長江や珠江流域にも部分的にひろがっている。京韻大鼓、西河大鼓、梅花大鼓、樂亭大鼓、京樂大鼓、東北大鼓、山東大鼓、膠東大鼓、安徽大鼓、上党大鼓、湖北大鼓、広西大鼓等の曲種がある。曲目は短篇が多いが、西河大鼓、京東大鼓には中篇、長篇のものもある。流行地域が異なるにつれて伴奏樂器や歌詞にも違いがある。

なって、老父母は歎き悲しみ、あちこち探すが、隣家の召使が“裏の池にとびこんだのじゃないか”というのでびっくり、池に網を打って引き揚げさせようとしたところへ、一通の手紙が届く。字の読めぬ母親に代って父親が見ると、これぞ姚瑞芳からの便り。“黙って家を出たのは、たとえ女子の身でも日本の侵略を坐視できぬため。一合戦して勝利を取ってから帰ります”という内容に、老父母はやっと一安心。

そこから錦州城下での姚女士の抗日の奮戦ぶりが一段唱われる。そして末段で、これは去年実際にあった話であり、「倭奴」が熱河を奪取し遼東も危急に瀕している現在、この話を聞いた男子の方々よ、女子に負けずにすみやかに武装して「倭奴」と一戦を交えられよ、話はここまでにして、何日かたって諸位^{みなさん}からの吉報を得たいものだ、と結ぶ。引子に始まり、白と -n、-ang 韻^{セリよ}などの唱^{うた}をまじえた劇的な構成をとった作品。

*③ 『説古今』(鼓詞) 乙種叢書 国恥類 第4冊、民国25年11月印、通俗読物出版社出版

③以下はすべて通俗読物出版社による出版で、ほとんどが乙種叢書とされているが、甲種(ないし丙種)と対比した性格は不明である。乙種叢書は「国恥類」(③)、「史地類」(④⑤⑧)、「社会類」(⑥⑩)、「自然類」(⑦)、「時事類」(⑩)などに細分されている。「歴史類」(⑨)が乙種叢書に入るか否かははっきりしない。

題名の「説古今」は「古今談」とも訳すべきもので、甲午中日戦争、いわゆる日清戦争以来の日本を中心とした列強の中国侵略小史が述べられている。第一次大戦に際して日本は山東に出兵し、21か条要求をつきつける。民国14(1925)年に国民革命の波がもりあがると、列強は国内の反動派を援助してその波に弾圧を加え、とくに日本は民国17(1928)年に山東に出兵して、北伐を妨害する。さらに民国20(1931)年、九・一八には瀋陽附近で事を起して東三省の占領を進め、華北諸省へと侵略の手を伸ばしつつある。これに対して中国政府はずるずると譲歩するだけで、日本側の横暴を喰い止めようとはしない。近くは綏東事件も起っている(民国25年11月)。今こそ民衆は政府をあてにせず、後援会や義勇軍を組織して、日本の侵寇に対して立ち上るときだ、とよびかける。句末には -ing 韻が多用されている。

民国25(1936)年11月出版のものはこの1冊だけである。

④ 『平倭記』乙種叢書 史地類 第12冊、民国26年1月印、通俗読物編刊社出版

④から⑦までの4冊子は民国26(1937)年1月の出版である。

「平倭記」は倭寇平定物語。明の嘉靖年間、杭州府錢塘県東門外の劉家荘に住む劉芳のもとに、友人李旺がたずねて来て、汪直を頭目とする倭寇の猖蹶の様子を語ってきかせる。やがて倭寇が劉家荘に襲来し、劉芳の妻を奪って去ってしまう。劉芳は最愛の妻を求めて探し歩くが、どこもかしこも惨憺たる状況。絶望した彼は、たまたま官軍が義勇隊を募集するのにめぐりあい、妻子の仇を報い同胞の害を除くためにこれに参加する。その大将は戚繼光といい、彼は「平倭」(倭寇平定)の戦術を書いた小冊子を1冊ずつ軍士に持たせ、虎狼の如き倭寇に立ち向かう法を教えたので、倭寇は戚軍の影を見ただけで逃げ出すほど。劉芳はその麾下の義勇軍の将となる。やがて戚軍の活躍で浙江省から倭寇は一掃され、さらに福建省横嶼に拠る倭寇も敗走して、東南七省

は倭寇の禍から解放される。この戚継光の功業に該当する人物は、現在中華においてはたして誰か、と結ぶ。

この冊子には浙江・福建の沿岸略図が挿入されている。句末には -ang 韻が多用。

⑤ 『文天祥』(単弦牌子曲) 乙種叢書 史地類 第18冊、民国26年1月
通俗読物編刊社出版

「単弦牌子曲」⁽¹⁾ は文天祥の奮戦を唱った本冊子だけ。

南宋末、伯顔^{ハクワン}のひきいる元軍は首都臨安(杭州)の郊外に迫り、南宋からは呂文煥ら3人が講和の使臣として遣わされる。呂文煥は右丞相文天祥を伯顔の軍營に直接呼び寄せることを画策。軍營にやって来た文天祥に対し、伯顔は南宋の降服を勧告し、すでに元軍に参じた呂文煥らも“時務を識る者こそ俊傑なり”と文天祥に帰順を勧めるが、文天祥は彼ら3人を売国奴と罵る。怒った伯顔は文天祥を北方へ連れ去らせるが、文天祥は途中で脱走。しかしその間に、彼はすでに元に降って漢奸となったという噂が流される。姓名を匿し飲食もままならず逃げのびている途中、文天祥は淮水のほとりで、もと丞相府の役人だった一老人に助けられ、その助言で志士、民団十万余人を連合させ、忠義衛國軍団を編成するのに成功、以後2年にわたり元軍との抗戦を続ける。しかしかの呂文煥の策によって、伯顔は南宋に対し民団の解散を要求。やむなく民団を解散した文天祥は、朝廷にもどる途中で呂文煥の弟呂武煥の計にかかって捕えられ、伯顔は彼を北京へ檻送する。獄中に在って文天祥は「正気歌」を作り、節を曲げぬ己れの志を述べる。今も北平東四牌楼北の府学胡同(元代には柴市といった)にある孔子廟傍の文天祥祠堂にこれが記されている、と結ぶ。

引子に始まり、唱と白^{うた せりふ}が交錯、句末の韻も -an、-ang、-ing、-ong、-ang、-an 等と多彩に転変して行く中篇。

⑥ 『工人苦』乙種叢書 社会類 第9冊、民国26年1月印、通俗読物編刊社出版

河南省歸徳府の夏邑県鍾家荘に住む農民鍾華光は、老父母をはじめ8人家族で暮していたが、睢水の洪水によって食糧はなくなり、老父の葬式のため耕地も手離して窮地に陥る。そこへ工人募集の一隊が繰り込んで来たので、彼は家族と涙ながらに別れて青島の工場に出かせぎに行く。着いたところは日章旗のひるがえる東洋(日本)の織物工場。そこでの労働条件は劣悪で、賃銀もろくに手もとに残らない。そこで給料値上げなど五項目を工場主に向けあう代表の一人に鍾華光は選ばれたが、海軍陸戦隊に護られた工場主によって暴行を受け、牢獄にぶちこまれる。獄中で鉄窓を仰ぎ見ながら彼は思う。“もしこの知らせが故郷に届いたら、老母や妻はきっと悲嘆するだろう。しかしみんなのために外国の工場主に反抗したのだ。たとえ死んでも悔いはない!”

(1) 『辞海』1979年版は「牌子曲」について次のように説明している。曲芸(歌謡芸能)の一種。各種の曲牌(曲調)を続けて唱って、叙事、叙情、説理を行なう歌謡の類はみなこれに入る。単弦、大調曲子、四川清音、湖南糸絃、広西文場等が含まれる。一般に一人で唱うが、五、六人で演ずる場合もある。伴奏楽器はさまざまで、北方で行なわれる牌子曲は三絃が多く、南方では揚琴、琵琶、二胡が多く使われる。各牌子曲の曲牌の数は一定せず、同じ曲牌がそれぞれにおいて使われている。

この『文天祥』中でしばしば括弧内に記されている「太平年」、「年太平」はこの曲牌の名称である。また同じく括弧内に記されている「吓啾啾啾」は発音の記号で、唱い終ったあとにつける感歎詞であり、特別の意味はない。この最後の項に関しては龔平伯先生の説明であると書き添えてあった(顧洪女士1982年8月23日書信)。

この工人の痛苦の話に、聞く者は涙と怒りがあふれて来る、と結ぶ。

洪水後の苦労にはじまり、青島の工場での悲惨な生活、彼らの要求に対する苛酷な工場側の弾圧などが、一句おきの -ang 韻でたみこむように唱われて行く。

*⑦ 『打虎』乙種叢書 自然類 第7冊、民国26年1月印、通俗読物編刊社出版

「打虎」の「虎」は虎唼拉コレラの略。「打虎」はコレラかくらん（霍乱ともいう）退治の意。

祁州城外の王家荘に住む張仁の息子小三がある日急病にかかる。隣家の王有常が見舞に行く、症状からすぐコレラとわかった。よい医者に薬をもらいに行くよう勧めるが、張仁夫婦はきかず、瘟神廟に線香を上げに行く。それでも治らないので東荘の趙先生から下痢止めの薬をもらって来てのませたが、その夜のうちに小三は死ぬ。

小三の死後、王家荘では日々同じ症状の病人がふえ死者が続出するが、王有常の家だけは彼がコレラの予防法を知っていて注意を怠らなかったので、一人も病人が出なかった、というお話。コレラの病因や予防法について、王有常が懇切に家族に教える段が、当時の一般民衆の流行病に対する知識の程度を具体的に示していて興味深いので試訳した。

冒頭の「西江月」調の50字は大活字で一段に、白せりよの部分は小活字で一段に、唱うたの部分は活字で二段に組んであり、句末の韻は -ang、-an、-n、-an と展開して行く。

⑧ 『守江陰』北平腔（小口大鼓）乙種叢書 史地類 第26冊、民国26年4月印
通俗読物編刊社出版

冒頭に「西江月」調（ただし50字の前半のみ）の引子があり、ついで、“江南まで一路南下した10万の清軍が、周囲10余里の江陰県で閻応元の抵抗に遭い、3カ月間手こずった、さてその詳細はゆるりと語りましょう”という白せりよの後に -an 韻の唱が終りまで続く。唱の部分は二段組み。全篇同一の大活字。

清側に降った將軍劉良佐の派遣した王恩が、城門外で矢を射かけられて逃げ帰り、こんどは劉良佐自身が出向くが、“賊寇に降った漢奸よ”と嘲られて激怒する。続いて守備側が用意した藁人形の計略によって、清軍側から大量の矢を手に入れた話、清軍の油断を見すまして夜襲をかけ、数千人を殺した話、降将2人を城門に跪かせて泣き落しをはかったが失敗した話などが唱われた末に、一千の民軍が十万の敵に対し、88日間も抵抗し得たのは、人々が心を合わせて共同して事に当たったからである、この話を聞かれた諸位みなさま、どうか合力救国をゆめお忘れなく、と結ぶ。

⑨ 『呉起』〔乙種叢書?〕歴史類 第24冊、民国26年4月印、通俗読物編刊社出版

この冊子には「某種叢書」という題記がないようだが、内容的には他の乙種に近い。

本冊子は“他能愛護士卒、與他們共甘苦、所以能打勝仗”（彼は士卒を愛護し、彼らと甘苦を共にしたので、勝利を収めることができた）というカコミの副題のもとに、魯国の將軍だった呉起の逸話が散文で淡々と述べられているだけで、唱うたの台本ではなく、ふつうの読物である。

齊軍と戦うに際し、齊国出身の自分の妻の首を携えて魯公に謁し大將に任じられた呉起は、兵士と同じ藁の上に眠り、老兵士の荷物を分けて担い、兵士の背中の腫物の膿を吸い出してやる。

これを見て、全軍の士卒は呉將軍のために死のうと感泣する。そして齊將田和の使者張丑をまんと騙して油断させ、田和の軍を大敗させる。

しかし呉起はのちに齊の逆スパイの計にあって魯を去り、魏の文侯に仕え、さらに楚の悼王のもとに赴き、富国強兵の成果をあげる。彼の治軍・謀国の法、とくに兵士を己が手足のように好遇した点は、われわれも見習うべきことだと結ぶ。

⑩ 『対内和平統一、対外一致抗戦』乙種叢書 時事類 第1冊、民国26年4月印
通俗読物編刊社出版

農民を教育する機会をつくるため冬休み中も学校に居残っていた教員王国幹のもとへ、2月15日（旧正月5日）、農民の劉万福、李永年の二青年がたずねて来て、この日に開会される三中全会の構成や権限について質問する。この白の質問に対し王国幹は -an 韻の唱で手短かに答える。ついで劉万富が今回の三中全会がとくに一般民衆の注目を集めているのはなぜか、と白で問うと、王国幹は“これまでの会議は「議而不決、決而不行」だったから無視されたのだ”と -ng 韻の四句の唱で答え、さらに白で“今次の会議はちがう、内外のきびしい情勢に三中全会がどう対処するかに関心が高まっている”と答える。さらに“老百姓們（民衆）は三中全会にどんな希望を抱いているか”と王国幹がたずねると、劉万富は“老百姓們には理屈はわからないが、願いは二つ、(1) 徹底して内戦に反対、和平統一を希望する、(2) 抗×（抗日の日が×で伏字）戦争を發動し民族の危亡を救うことである”と答え、二青年もごもその理由について -ng 韻で唱う。王国幹は深くうなづき、二青年は家へもどる、というところで終る。白の部分は小活字で一段組み、唱は大活字で二段組み。

⑪ 『槍斃毒犯』乙種叢書 社会類 第14冊、民国26年5月印、通俗読物編刊社出版

本冊子には「慈母涙」（一名槍斃毒犯）と「白面客嘆五更」の2篇の改良大鼓を収める。主題はいずれも麻薬患者にかかわる。

「慈母涙」は、郊外で銃殺刑に処された候会南という麻薬重犯者の屍体にとりすがる老母の嘆きを軸とし、まわりの人が、“これも外国の鬼子が金丹（アヘン）、白面（ヘロイン）、大煙（アヘン）をわが国に持ち込むからだ”と彼女をなだめる。この話を聞いた同胞よ、ただちに目ざめてほしい、監獄に入れられてからでは間に合わぬのだ、と結ぶ。全篇 -an 韻で一貫している。

「白面客嘆五更」は、白面客（ヘロイン患者）が一更から五更までの月の動きとともに、わが身の転落ぶりを嘆くという趣向をこらしている。

一更は月の出で、-ng 韻。麻薬に手を出したために家財を蕩尽し、精神、肉体ともに崩れてしまったことを歎く。

二更は月やや高く、-iao 韻。みめよく仲睦まじかった妻とも今は離別したことを嘆く。

三更で月は中天、-ng 韻。学問をして身を立て国に報ずべきだったこの身が、今は廢人となったことを嘆く。

四更で月は落ちかかり、-uo 韻。洋人がアヘン、モルヒネ、ヘロイン等を中国に持ちこんだことを恨み、これが彼らの毒計であることを自覚せねばならぬと悟る。

五更に及んで月は西に沈み、-en、-in 韻。今や東北四省は敵手に落ち、全員挺身して戦うべき

時期に、こんな麻薬に恋々としているとは何事か。こんな体では敵に立ち向うこともできはせぬ。——と最後は全国同胞に悪習を絶って新民となることを期待して結ぶ。

以上2篇とも大活字で二段に組んである。

なお*印を附した3冊分の訳文の後に、11種の冊子原文をすべて収録するが、その収録方針は次の通り。

1. 原文はすべて縦書きだが、ここでは横組みにした。
2. 原文には石印版、活字版の両種があり、活字版にも文字の大小、一段組み二段組みの差があるが、ここではそれらの様式のちがいを忠実に再現はしなかった。
3. 原文の明らかな誤植は訂正した。
例：丞相→丞相、跳染→跳梁
4. 異体字は普通の活字に直した。
例：湏→須、兎→兎
5. 常用される簡体字はほぼそのままにした。
几(=幾)、机(=機)、响(=響)
6. 叫と叫、個と个が混用されている場合も、原文の字をそのまま残した。

訳 文

胡阿毛、車を運転して黄浦江に突入

九・一八事変が瀋陽で起こりますと〔1931年〕、わが辺境守備の将軍は全く抵抗を抛棄して、国際連盟に処理を任せきりにいたしました。すると今度は上海が戦場になります〔1932年1月〕。話によると日本人めが上海で戦闘を始めたのは、武力によって中央政府をおどしつけるがためとのこと。ところが政府のやり方はいともあっさり、ガラガラと一気に車に乗って洛陽へと移ってしまいます。この遷都のことはしばらくおくとして、ひとつここでは上海での戦闘の様相をばくわしくお話するといたしましょう。

戦いにすぐれた名高い十九路軍の軍長蔡廷楹は、日軍めに対し軍備おさおさ怠りなく、和議成らずと見るや戦端を開きました。

見えるは黄浦江上にただよう一陣の殺気、聞こえるは終日とどろく野砲・重砲のひびき。

ドーンとばかりに建物は崩れ壁は倒れる。手榴弾はダダーン、ダダーンと次々に破裂し、ダダダダッとたたつづけに機関銃は鳴る。空からは飛行機が次々と襲いかかり、焼夷弾が破裂してあちこちに火の手があらがる。

堂々たる図書館は燃えて焦土となり、商務印書館も焼けて四面の壁を残すばかり。

どれほどの商店が焼けたか知れず、どれほどの宿屋や民家が焼けたか知れません。

銃弾は雨の如く地面に注ぎ、砲弾の落下を避けるすべはなく、無辜の良民がどれほど死んだか知れず、語れば誰もが思わず涙にかきくれます。金持ちは租界にもぐりこむが、貧乏人はあちこちと逃げまどうばかり。生き延びるためには兄弟はおろか、妻子も親もかまってはおられません。一旦日軍めに捉まれば、銃殺されるか胸を割かれるかの運命。中には最後まで虎のように暴れる者もあり、羊のようにおとなしく首を切られる者もある。

国に生命を捧げた英雄たちは数知れずありますが、さてここで話する英雄は、その本業は自動車の運転手でありました。この人は名を阿毛、姓を胡といい、生来忠烈な心の持ち主。平時にはもともと上海で自動車を運転し、一日中大通りを東奔西走しておりました。江湖をさすらい天下をへめぐるとまでは参りませんが、上海なる大都市は隅なく走りまわっておりました。ところがこのところ戦闘が激化して自動車屋は休業、胡阿毛は隙をもてあまし、心中くさくさしておりました。

ある日、阿毛が街へ出て散歩しておりますと、なんと数人の日本兵めにとつつかまり、兵営の中に引っぱりこまれてしまいました。持っていた運転免許証が見つかったため、むりやり日軍の自動車の運転手をやらされることになったのです。阿毛は気が進まなかった

が、如何せん衆寡敵せず死んでも無駄なこと、やむなく成行きに任せてこのお仕事を仰せつかることになりました。

この日、阿毛は三人の日軍将校を車に載せて出発し、ほどなく黄浦江近くにさしかかりました。黄浦江の浪は立ちさわぎ、浪しぶきが飛び散っております。阿毛は運転しながら考えているうちに、思わず怒りが胸中にこみあげて来ました。

「おれは昔は青天白日旗の下で走りまわっていた。どうして今、頭上の旗は日の丸にとりかえられてしまったのだ。このおれは本来、中華民国の一本立ちの男一匹。なのにどうしておしらは日本のために手助けせねばならんのか。それにどのみちいつかは死ぬわが身、生きてるより死ぬ方がましかもしれん。」

思えばますます恨めしく、心中じっと思いめぐらします。

「いまこの車に三人乗っている日本の軍人め、おれの生命もろとも、こいつらを道連れに黄浦江にとびこんでやろう。こいつらが尺寸たりとも中国の領土を手に入れぬうちに、この三人の腹の中に煮え湯を流しこんでやれ。」

考えが決まればさっそく実行、自動車のスピードを上げて黄浦江の橋にさしかかると、両腕で力いっぱいハンドルを切って、大声一番罵りました。

「日本兵め、やるぞ！」

言うより早く、ポチャンという音とともに、人も車も一気に黄浦江に落下したのです。川の流れは滔々と東に流れ去り、一望はてしない大海に注ぎます。靈魂はきつとにっこりと微笑みながら、あの三人の日本軍人めを閻魔さまの面前に引っぱって行ったことでしょう。

こうした愛国の行為は誰にでもできることなのです。士・農・工・商、どんな仕事であろうと問いません。学者は腕をふるって呼びかけて民衆を立ち上らせ、農民はしっかり耕して軍糧をたくわえ、工員はたとえ餓死しても日本の工場では働かず、商人は断じて日本と取引きをしない。戦いに当る兵士たちは言うまでもありますまい。軍隊はもともと国防のためなのですから。もしわれら四億の同胞すべてが連合し日本にこうして立ち向かったなら、なんであのちっぽげな三つの島国が滅亡しないですむでしょうか。決して忘れてなりません、四億同胞みんな揃って抗日し、われらが祖国に栄光をかちとることを。

朝鮮を歎く

朝鮮は亡国以来数十年、国内の人民はひどい苦しみを嘗めております。この亡国の事態は触れねばそれまでのことですが、一旦この話をすればきつとわが国民の心胆は慄えあがることでしょう。

思えば朝鮮がまだ亡びなかつたその頃は、民は安楽に、誰もがみんな自主・自由の権をもっておりました。毎年四季は平安に過ぎ、どの家々も楽しみ満ちあふれておりました。後になって国家が亡び日本に併合されてからというもの、主権・領土・資本・財産はこ

とごとく奪い取られます。後になって日本が朝鮮をどう扱ったかと申しますと、専制の苛政この上なし。帝国主義の侵略で、朝鮮の民の受けた苦難はひどいもの。滅びた民で最も気の毒なのは、納入を迫られる苛酷なさまざまな税金。一つでも納め損なったりすれば、たちまち銃殺、閻魔さまにお目通り。彼らがもし時たま議論でもすれば、舌を切られて物も言えず、親戚友人にも会えませぬ。ピラ撒きでもしようものなら、1時間もたたぬうち、たちまち日本人につかまって牢屋送りとなる

始末。庖丁1本は10軒の共用、鉄の鎖は警察にまとめられ、朝鮮人の鉄器所蔵を許しません。巡察のときに一命が助かっても、おかげで家には一文の銭もなく、人民のくらしは困難の連続。思わず全国人民そろって悲鳴をあげても、日本人は知って知らぬふり。哭きでもすればたちまち殺される、そこで笑顔をとりにつくるおねばなりません。

こうした残虐はまだ序の口、しでかす悪行我慢がならぬ。一軒一軒家捜ししては、かくれた美女を選び出し、かまわず淫楽好き放題。朝鮮人が怒りを口には出さぬのをいいことに、ひとの女房を奪い取り、ひとの娘を強姦する。一人言うたことをきかぬ者があれば、刀が首にて一卷の終り、一家親族たちまち離散し、家庭の団樂も一朝の夢。

やむなく人々寄り集い、生命がけの覚悟で謀反の計画を立てますが、鉄砲・刀がない以上とても無理なこと。もし日人に反抗計画が知れたりすれば、一人残らず斬り殺されるにきまっています。男どもは逃散するしか道はなく、妻や子どもは家に置き去り。年寄り子供や動けぬ病人は、川に身を投げ井戸に跳びこむほかありません。

亡国の先例はとてども語り尽せるものでなく、ここでわが国の歴史に立ち戻ってお話いたします。古来、強盛並ぶ者なかりしは衆知のところ、諸外国そろってわが国に進貢しておりました。ところが、清朝の失敗のため、日賊にわが台湾と大連を奪い取られてしまいます。近年、日人は一寸一尺と飽くなき欲を拡大し、さらに東北三省・熱河地区を取りました。彼らはわが国土をみな併合しようと、あの朝鮮・インドと同様に見ているのです。東北の同胞は塗炭の苦しみに陥り、日人に殴

られ犯されること堪えがたく、各県の人民は時に話し合い、日人の残虐さを罵りあう。たまたまそれが日賊に知られでもすれば、ピストルの弾丸で射ち殺されるわが民の数は幾千幾万にもものぼります。

ああ憐れ、東北の同胞は苦しみに喘いでいます。ただちに武器を執って恨みを雪ぎ国難を救いに駆けつけましょう。「国家の興亡は匹夫も責あり」と昔から申します。「自己の門前の雪を掃くだけ、他家の瓦の上の霜にはかまうな」式の諺には耳を借してはなりません。敵弾のもとに斃れても、生きながらえて朝鮮の如き亡国の奴隷とはなりませんまい。もしも君が手を懐にして他人事さと傍観放置していると、将来日賊が君のところを押しかけてから後悔しても遅いのです。

馬革もて屍を褻み 名 万載に伝う、

国の為に身を殉ずるは 理当に然るべし。

愛国の精神 人人有す、

趕快に発奮して 疆邊に到らん。

英・米などの国々にあざ笑われ、わが民族は軟弱で仕方がないと言われたくはありません。われら四億の民族が、幾万幾千程度の日本兵めに及ばぬはずはありますまい。真に恥ずべし、真に恨むべし、齒を食いしばり眉根を寄せ、誓って日本を滅ぼすまで、死ぬるも悔いず志は堅固。われら士・農・工・商の区別なく、ただちに東北の戦場に赴こうではありませんか。大刀ひと振り突撃し、敵の戦車・銃剣・飛行機・爆弾などものともせず突進し、敵の兵隊一人も余さず殲滅するまでやり抜きましょう。

ここで話は一区切り、わたしはこれから戦場へ駆けつけます。あとは戦いに勝つてもどってから詳しくお話いたします。

小口 皇 帝 の 夢

人この世に生まれてみだりに忙わしく、策略を張りめぐらすに心を砕き、武勇・強大を

誇りて名利を争うを事とし、かの天理なるものの昭覧さるるなど物ともせず、覇術に依りて欲望は限りなく、武力もて専制の王となる。見ずや、かの万里の長城は今なお存在すれど、笑止、かつての秦の始皇帝、程なく滅亡せること一場の大夢に似たり。

(腔) かの帝堯の治めたまえる世は四海頌揚すれど、帝舜の譲りたる夏の禹王は無道の君。治水に功ありしとて、自家に天下を伝うることは許されず。果せるかな桀に至りて商の湯王は夏に代り、その国運長からざりき。商の紂王より元・明に至るまで、王朝の入れ換れること数多く、興亡の原因は強は存し弱は亡ぶの外に出でず。

皇帝政治の暴威に人民は我慢しきれず、清朝の世になって革命の開祖〔孫文〕が大義を提倡、専制帝国主義を打倒して、中華共和国を建てました。廢君〔宣統帝〕を優待してその帝号を前通りに残し、私産を保護してその生命は無事でした。退位した以上紫禁城にはとどまれず、そこを出て別に住居を探さねばならなくなり、そこで天津の日本租界に移りました。ところがかの日人めがよからぬ心を起し、これぞ「奇貨居うべし」とばかりにいかにも親善を装います。左右に侍って寸時も身辺を離れず、遊びに外出する時も、かの日兵が車にまたがり手にピストルを握りしめ、見かけは護衛でも、暗に監視をしているのです。仮の仁義で列強をごまかしてはいても、日本が東三省を手に入れたがっていることは今に始まったことではありません。そこで詭計を企て廢帝をたぶらかし、こう言ったのです。「われわれが出兵して東三省の地を攻撃し、奉天であなを新満州国王にしてあげましょう。」

(腔) かの偽皇帝この話を聞いて心はずみ、思わず手足は躍りて嬉しさ限りなく、「貴国まことにわれを皇帝に立て給わん

には、貴殿らに朝晩尊き香をば焚き奉らん」とぞ申しける。

彼はひたすら皇帝になりたい欲に駆られて、実は醉生夢死、よく考えもしなかったのです。世界の潮流が共和政体に移っていることも考えず、君主帝制が長続きできないことも考えず、民国にそむけば重罪犯になることも考えず、日人の陰謀に悪い企らみがあることも考えず、利に誘われて盲目となり、その輝きに眼がくらみ、まるで人形が操られるようにおだてられて登場したのです。

(腔) これぞ日人の奸詐籠絡の計、かくて出兵の名目あれば辺境までも侵略す。かの張〔学良〕將軍は公理に従いて抵抗せざるも、野蛮なる日人なんぞ大義綱常を解せん。日人次々とわが遼東・熱河を侵すに、空しく奉呈するのみにて、一矢も報ゆるなし。

思えば始めから彼らにだまされていたわけで、今となって悔んでみても間に合わず、悲しんでみても無駄なこと。九鼎に大間違いを鑄出したるは英雄千古の恨みなるも、われら努めて檻の手入れをすれば、まだ羊は逃げずに済もう。

(腔上板) 雷鳴一撃して黒雲散じ、青空に太陽は光りかがやく。士気は山河に満ちあふれ、死生をかえりみず前進する。長城のもとでは熱き血が流れ、砲声は島国を撃破する。びっくり偽皇帝は胆っ玉つぶれ、口に思わず「お母さん」と呼ぶ。それも栄貴の欲に溺れたため、今となってあわてても追いつかぬ。日本め、心の陰險なやつめ、勝手にわしを天子の座に据えおって。南面、天子となりはしたが、自分で法律定めもならず。大権すべて日人の手に、国事もわしに相談はなし。時に何かを質したりすれば、きつと日人にいやみを言われる。勝手にのさばること曹操・王莽の如く、まるでわしを朝鮮国

王と同じに扱われる。明らかにわしを人形扱いにして、仁も仮、義も仮、心も仮。あいつは民国と戦端を開き、そこで奉天・吉林・黒竜江まで侵略した。自分の植民地をひろげては、進攻退守、辺境の防備を固めおる。もし僥倖に勝ちでもしたら、きっと満州国も滅ぼすにちがいない。わしはあいつの話に従ってはいはならぬ。わしは自分で主張をもたねばならぬ。わしは虎の悪事の手先になってはならぬ。わしは〔山海〕関を出て偽皇帝になってはならぬ。今はもはや騎虎の勢、生死存亡は運まかせ。皇帝、心中にあれこれ思うとき、大砲はドドーンと山野を震わせ、中華民国の義勇軍は敵に戦場で決戦を挑む。かの民衆団体慰問会は、食物・飲物を前線に送る。兵士は国と人民を護り、人民は金や食糧を援助する。外侮を禦ぐ

には軍備が必須、武力が足りれば国勢はあがる。欧米各国はその模範、文武の備えは我が国にまさる。みんなで起ち上りさっそく手本にし、しっかり牛耳を執ってアジアの覇者となろう。何より大事は全員が心を合わせ一致すること、街中、むやみにワイワイ叫ぶことはない。叫んで声かれ喉がつかれるよりは、敵に向かって一矢を報いた方がよい。万民心を一にしてひたすら外敵に向かい、兄弟艦に闘ぐことは止めようではないか。同舟の人が助け合って外侮を禦げば、日人を撃破して民気は高揚するだろう。

(挿板) 望むらくは、この戦争終結して失地は回復され、三省平定されて偽皇帝の打倒されんこと。その暁には鞭は鳴り鐘は響きて、凱歌斉唱、わが民国の永遠に続くを祝福せん。

古今談 (鼓詞)

さあ、昔と今の話を行います。話をみんなで聴き下さい。この話はほかでもない、ただ眼の前の大事件の物語り。

甲午の年〔1894年〕、中日両国間に戦争が始まり、日本は全国の兵を動員する。軍事国債には誰もが応じ、勝敗の帰趨には老若みな関心を持ちました。ところが我国はと言えば残念至極、この一大事をごく軽く見たのであります。西太后は宮殿の奥深く安穩の日々を送り、文武百官は自己の利害に目ざといばかり、北洋海軍は黄海の海戦で敗北し、李鴻章の淮軍も瀋陽で敗退してしまいます。あわてて文武百官は家族を逃げ出させるに手一杯、王公大臣は北京を捨てて朝廷を他へ移すことばかりを考えます。上のお偉い方々は自己の打算ばかりに専念して、家を失い妻子離散した下々の民草のことなど誰も考えてはくれません。あわれ民草、その多くは日軍の砲火で

殺され、その多くは逃げる途中で命を失い、その多くは家屋財産をことごとく掠奪され、その多くは先祖の墓を踏み荒らされました。こうした手ひどい仕打ちでもまだ足りず、ほどなくさらに骨身を削って賠償金を支払わねばならなくなりました。李鴻章が和議に出かけて結んだ「馬関条約」の内容は、領土の割譲、賠償の支払い、市港の開放、領事官の設置、通商や工場経営の免税、撤兵の延期。朝鮮を取られただけに止まらず、澎湖諸島・台湾・関東州までも割譲し、軍費賠償金は2億両、ためにわが国庫は空虚、万民は貧窮に陥りました。この身売り証文で中国が切り売りされますと、それからというもの、日本は虎が翼をつけた勢いでわが国の独占を企てたのです。内閣で「大陸政策」が決まると、陸海軍の大臣はせっせと増兵、チャンスの再来を待ち望み、中国を征服して東亜の覇権を握るこ

とを考えました。あいにく日本は時運に恵まれ、欧州列強が戦争に突入、英・独二国は西欧で戦うばかりか、戦禍をアジアにひろげました。英人がドイツの勢力をアジアから一掃しようと、日本と密約を結んだため、日人はワッハと笑い、「中国への進攻は以前からのわが狙い、この機に乗じて先ず山東地方を奪い、ついで華北数省を併呑せん」と言う次第。さっそく人馬を発動し、海を渡ってわが国土に侵入、まず竜口から上陸し、たちまち次いで萊州を占領。半島を横断して膠州をめざし、幾万の大軍が南下します。沿道の町村みな占領され、びっくり民草ふるえおののき、食糧・稜は根こそぎ奪われ、鞭で打たれ縄でしばられこき使われるばかり。膠東〔半島部分〕を占領しただけではまだ済まず、こんどは鉄道沿いに西進し、濰県・済南みな占領、鉄道・鉞山ことごとく日本人のものとなって行く。こうした痛苦のことはしばらくおくとして、ここに霹靂一声、天下おどろきました。「二十一条条」の承認をわれらに迫って来たのです。その悪辣な要求の内容は世間に広く知られる通り。山東・南満と内蒙古の土地、沿海の島嶼をみな併呑させよ。北方だけでなく、さらに南方の湖北・湖南・江西・福建の各省で、鉄道敷設・鉞山採掘を日本にやらせよ。中国の財政は日本の顧問が管理し、軍隊の訓練にも日本人を迎えよ。もひとつ稀有のことは、日本の警察官をわれわれに代って巡警させよという要求です。もしこうした要求がみな満たされたなら、中国は実は亡んで名が存するだけ。この時のわが国の総統は袁世凱、帝位にのぼることのみ思いつめ、ひそかに日本の要求を受け容れて、日本の保護を頼りに朝廷を立てようとしたのです。古来、上に立つ方々はみな私利をはかるばかり、国家・人民の利害を心に止める者など誰もおりません。袁世凱は日本と共謀して軽々しく權益を切り売りし、中国に無限の禍根を残しました。これらの痛

恨事についてはしばらくおいて、次にここ数年來の大事件についてお話いたします。

民国 14 年〔1925 年〕、わが国には大革命がおこり、〔商・工・学〕各界では人々心を揃えてストライキ、食糧・労力・兵士を送り出しました。列強の勢力を中華の土地から追い出し、同時に北洋政府を一掃せんがためでした。広東は革命の根拠地となり、ここで北伐軍が訓練され、十万の精兵は数手に分れて北進し、無数の民夫は先を争って前進、東南五省では孫伝芳を追い出し、軍は湖北に進出して長江の中心〔武漢〕を占領しました。波止場の入夫は天秤棒の力で英租界を奪回し、農民は立ち上って土豪劣紳を打倒する。陝西・甘肅の二省でも革命がもちあがり、河南の「紅槍会」は奉天軍を追い出します。びっくりしたのは外国のお偉方、あわてふためき為すすべを知らず。びっくりしたのは高貴なお役人方、ぶるぶるドキドキするばかり。「平民どもが謀反をおこした」と言う者あれば、「奴隷どもめが変心しおった」と言う者もある。「このまま行けばとんでもないことになるぞ。人民が立ち上って中国が復興するくらいなら、早いうちに手を打って、革命を残らず撲滅するがよい。」列強の考えが相談でまとまり、おどしやすかしかかかって来ます。上と結んで下を打つ、その手段は神妙、人民の圧殺には情容赦ありません。昔からの諺に、「物必ず先ず腐り、然る後虫生ず」とはよく言ったもの。「お前の要求は過激すぎる」と言う者あれば、「どうして口先だけで実行しないのだ」と言う者もある。双方、相手の意向に不満で対立はますますひどく、紛争が起りました。黄浦江上、風雲変じ、洞庭湖中、波浪興る。あわれ、最後の詰めの段階で事は破れ、外国のお偉方の高笑を許してしまいました。「こうなれば、われらはもう恐れることはない。誰がよいかダメか、誰が最も具合がいいかをよく考えよう。」各国の權益はみな保証されて

いる中で、日本はまたもや単独で事を進めました。機に乗じて山東地方に出兵し、南軍が北進するのを阻止したのです。民国 17 年〔1928年〕5月3日のこと、済南城頭に軍隊を動かし、多くの人民は虐殺され、外交官は鼻をそがれ心臓を抉られました。この悲痛な出来事は誰もが知るところ、さらにその後の事をお話すれば、もっとびっくりなさるでしょう。

日人は朝鮮占領以後、南満の経営をどしどし進めました。関東軍・関東庁・満鉄会社と、軍事・政治・経済を手分けして進め、時機の再来を待って、満蒙を独占せんものと構えます。民国 20 年〔1931年〕9月 18 日夜のこと、瀋陽城附近に大禍が発生。グワーン、グワーンと大砲は立て続けに鳴り響き、バラバラッと騎兵は飛ぶように走る。ブルルンと飛行機は空から舞い降り、プリンプリンと戦車は地面を匍いまわる。わが多数の老人幼児は爆死し、わが多数の家屋・城壁は崩壊し、わが多数の母親・子供は離散し、わが多数の扉や門は焼けくずれました。次から次へと占領されても、わが守備の軍隊はとめどもなく撤退するだけ。それというのも、「不抵抗主義」を上がやれば下も倣う、という次第。こうして空しく東三省は失われてしまったのです。將軍は逃げ帰っても官職があるが、あわれ千百万の民草にとっては、家があっても帰るを待たず、無理に帰れば死を待つばかり。

昔から「一寸手にすりゃ一尺欲しがらる」というように、人の心はみな同じ、そこであいつはさらに人馬を動員して西に進みます。先ず熱河を奪い取り次は察哈爾^{チヤハル}へ、綏遠を手に入れてこんどは寧夏へ——この満蒙併呑の策略はまことに巧妙、華北の各省はみなその掌中に入ってしまう。もし中国の大半〔華北〕を取ったとすれば、次は南の三江〔江蘇・浙江・江西〕・両湖〔湖北・湖南〕・粵〔広東〕・閩〔福建〕の番です。敵まだ遠しと思し召さ

るな、たちまち大禍は降りかかる。三年前、長城の各所で血戦あり、今また綏遠で衝突おこる。長城の戦いに意気揚がり、兄弟たちは敵を皆殺し。やったり！ やつらの屍は累々と横たわり、やったり！ やつらの泣声は綿綿とつづく。誰もが一気に振り立ち東北めざして攻め込むかと思っておれば、何たることぞ政府の外交はまたまた協定づくり。外交官は塘沽^{タンク}で杯を挙げて慶賀しても、兄弟たちは前線から涙をぬぐって撤兵する。この痛根事はどなたも御存知、今度は「平津演習」の大問題を語りましょう。

長城からの撤兵以後、「冀東〔河北省東北部〕にまた政府ができる。」22 県はもはやわがものにあらず、日軍はまた大挙して平津地区に入りこみます。まず豊台でわが国の軍隊を追い払い、鉄道を占拠して通行を許しません。天津では兵營をつくるのに労働者を招募し、工事が終ると彼らを河流に投げこみました。彼らはいずれもわが国の男たち、誰もが父母や妻子を抱える身。こうして魚の餌になり海底に沈んでしまえば、残った父母や妻子は誰に頼ってくらせましょう。何千軒もの被害者、昼夜に泣き悲しむも、眼の前のやつらの威張りよう、「歎きを訴えん術^{すべ}もなし。」これぞ「禍は単行せず、福は雙至せず」というところ、やつらはさらに平津地区で軍を動かしてはじめます。沿道、男をつかまえ食糧を索め、老幼・貧者も容赦なく、つかまえた男たちには武器を運ばせ、入りこんだ民家は兵營にする。家屋を占拠されるくらいはましな方、多くの家屋はぶちこわされる。家屋をぶちこわされるくらいはましな方、一帯の植付けは根こそぎ荒らされてしまいます。馬蹄に踏みこまれて行くのは手塩にかけた作物、戦車がゴウゴウと踏み倒して行くのは先祖伝来の墳墓。弾丸は父祖の家産を穴ぼこにし、大砲は人の心胆を慄え上らせる。眼にするはいずれも日本兵のやつら、老若の民草は「どこに

逃げのびればよいのか。」人は言う、「こんどはほんの仮かりの進攻だ」と。だが「いつかは仮が真にすりかわる」かも知れません。こんどの「仮かり[臨時]の措置」でも人民はたっぷり苦しみを嘗めたのに、「真の行動」が起ればどんな悲痛な事態が生ずるやら。

この地で砲声が止んだかと思うと、[1936年11月] 綏東地区からまた変事のしらせ。李守信・王英が前哨となって張海鵬の大隊が後に続き、さらに徳王・卓什海が綏北から兵をひきいて進み、東北から四手に分れて進撃、綏遠の奪取を狙いました。彼ら禍国殃民の漢奸たちは先鋒の受持ちで、日軍めが背後でたえず操って戦わせているのです。その上、あの日の丸をつけた飛行機の空中からの爆撃は、官・兵・民の差別なし。飛行機から投下される焼夷弾は、山野をあまねく焼き払う。前線の兄弟たちは決死で戦い、一般の民草も覚悟を固めます。心をあわせて進撃し、敵を残らず薙ぎ倒せ。さきの数次いくさの戦いで、敵を敗走させはしたが、大きな戦がまもなくやって来ます。

諺に「追いつめられれば兎も噛みつく」と申します。まさか「よろず民草、心を一つに

できはせぬ」とは言えますまい。国亡び家破れ民族滅びる間際になって、それから立て直しをはかってみても、できる道理はありません。いざ立ち上がれ立ち上がれ、今こそすぐに立ち上がれ。己おのが力の限りにやり、己おのが武器もて敵と渡り合え。政府の行なう交渉をあてにするな、国に「心中の不满」の解消を期待するな。ましてや天命を信ずるなどもっての外、じっと我慢して声も立てぬのもっての外。これまでの[政府の]交渉をわれらは安易に考えて来たが、どの条約ととも[内容は]悲痛ならざるものはない。昔から己れを救うはみな自らの力、解放の重責も自ら担うほかはない。後援会・義勇軍で前線に加わり敵と渡り合い、綏遠地区を固守するに止まらず、長春にまで進攻し、日人めを東の海に追い帰し、外国のお偉方を中華の土地から追い出してしましましょう。その時はじめて皆がしあわせに、妻子や老幼、一堂に会して喜び合えることでしょう。

このたび致しましたる昔と今のお話、みなさんどうか直ちに立ち上がって、がんばって前進して下さいませよう。

コ レ ラ 退 治

霍乱かくらんの暴威最もすさまじく、毎年多くの死者を出す。別名をコレラと称し、まことにまことに怖ろしい病やまい。発病すると嘔吐が続き、腹痛は刀で挟られるよう。唇は紫に変わり眼はくぼみ、生命はやがて消え果てる。

みなさん、この「西江月」調ツウの詞はなぜ作られたとお思いですか？ もともと霍乱、別名コレラは最も危険な伝染病です。毎年、夏と秋がこの病気の最流行期で、死者が多数出ます。ところがわが中国では科学が発達していないために、片田舎の村人たちは、病気が発生しないう

ちから予防などせず、病気が発生すると、お香を上げて仏様を拜むか、さもなければ誰か怪しげな漢方医を迎えて、いいかげんに草根木皮を調合して飲ませるだけ。これではどれだけ多数の人命が失われるか知りません。どうかみなさん、霍乱は危険な病気ですが、予防してこれを発生させない方法がいくらかあるのです。どうかゆるりとお話するのをお聴き下さい。

話は[河北省]祁州城外ワンオアチョワンの王家莊ワンでのこと、一軒ワンの王という姓の御大家がありました。王

家は以前に郷長をつとめ、その名を王有常ワンヨウチヤンと申します。この村では十人中九人が字を読めませんが、王有常は学校へ通ったことがありました。この日、王有常が家ですわっておりますと、急に隣りの張仁チヤンレンの家からワアワアとさわぐ声。それに激しく泣き叫ぶ声も聞えます。「とうちゃん!」「かあちゃん!」王有常はしだいに気持が落ち着かず、やむなく張家へ様子をたずねに参りました。するとそれは張仁の子供小三シアオサンが病気にかかったので、張仁夫婦が看病しております。張仁あわてて席を譲り、王有常旦那に訴えました。「この子はもともと体は丈夫、なのに今日病気になりやした。」張仁と有常がそばで話をしているうちにも、小三はしきりにうなづいて両親を呼びます。有常がよくよく見ると、小三の両眼は落ちくぼみ顔色は真っ黄色。吐くかと思えば続いて下し、吐いたものは水のように、下したものは米の磨汁トシユのよう。小三が言う、「おなかがきりきり痛いよう、それに足がひきつてる。」張仁が「おれは東莊トンチュウワンに薬を取りに行く」と言うと、かみさんは、「瘟神廟ウエンシエンミヤオへ線香を上げに行つた方がいいよ。瘟神さまは昔から効目がある、線香を上げる方が薬を飲むよりずっとましさ」と言う。これを聞いて王有常は申しました。張仁よ、よおくお聴き：

王有常は小三の病気が霍乱だと気づきました。線香や仏さまが何の役に立ちましょう。彼はさっそく張仁に言いました。「おまえ、小三のかかった病気は霍乱、またの名をコレラというやつで、ひどく危険な伝染病だ。線香を上げて役には立たぬ。やはり急いで誰かりっぱな先生から薬をもらって飲ませねば。」王有常に霍乱がきわめて伝染しやすいことを知っていたので、これだけ話すと、急いで家にもどりました。

家にもどつた王有常の話はあとにして、また張仁について語りましょう。小三の病状が

ますます悪くなるのを見ては、出るは溜息、居ても立ってもいられません。またもや奥方さまに声をかけ、奥方おまえよおくお聴き：

「有常旦那の言うことはあんまりあてにはならねえ。コレラとやらが伝染うつるなんて信じられん。やっぱり瘟神廟にお線香を上げてお供えをし、瘟神さまの御慈悲で御加護をお祈りしなくては。」

張仁のかみさん間をおかず、さつとばかりに線香を取り出します。急ぎに急いで参りますと、瘟神廟ははや面前。お供えしてから線香を上げ、台の前に身をかがめてお祈りします。「どうか瘟神さま、助けてください。小三を楽にしてやってください。」お祈り終えるや早々に、家路へとって返します。小三の病状はよくなるどころか、時々気を失つては白眼をむき出します。張仁が「おれは東莊に行って趙先生チヤウにお願いしてみる。先生の医术は神仙並みだそうだと」と言うと、かみさん聞いてしきりに言う、「それがいいよ、早く行って早く帰つておくれ。」張仁聞くや間もおかず、さつとばかりに上衣を着ます。東莊までは一里足らずの道、しばらくも待たぬ間にもうもどつて参りました。懐ふところから一包みの薬を取り出し、奥方さまに向かつて、お前よおくお聴き：

「趙先生がおっしゃるには、この薬で吐き気も下痢も止まる。薬の利きめは仙丹と同じだよ。」

かみさんお碗に半ば白湯まじゆを注ぎ、小三を抱え起して薬をのませます。小三やと薬のみ下しましたので、張仁夫婦は大喜び。誰もがこれで小三は助かると思ったのですが、なんとその晩に小三の生命は絶えてしまいました。

みなさん、霍乱かくらんという病気はきわめて危険なものですが、この病気にかかれば必ず死ぬとは限らないのです。小三の病状は最初はそれほどひどくはなく、彼が死んだ原因は、第一に彼の両親が迷信に

まどわされていたからです。両親がもし線香を上げるなどと言わず、真先にりっぱな先生に頼んで診てもらっていたら、死ぬことはなかったでしょう。第二には、趙先生とやらにたぶらかされたのです。もともと霍乱にかかった者が吐き気止め下痢止めの薬を飲めば、極めて危険なのです。

小三が死んで、張仁夫婦が歎き悲しんだことはもちろんですが、これについては述べません。ところで霍乱はもともと伝染病なのに、王家荘の住民は、王有常を除いて、誰一人として予防のことを知りませんでした。そこで小三が死んでから、霍乱の病にかかる者が日一日とふえて参ります。

小三の生命が消えてから、王家荘では毎日病人が出ます。病状はすべて小三と同じで、吐いて下して腹が痛み筋肉がひきつる。口がからからになり小便は出ず、手足は冷え切って身体中に汗をかく。食べたくも飲みたくもなく、体中、力が抜け意識がなくなる。病人は十中九人が死に、十軒のうち九軒に病人が出る有様。今日張さんチヤンと李さんリの埋葬が終ったかと思えば、翌日には鄭さんチヨンと孫さんスンが亡くなります。霍乱が人を殺すさまは虎の如く兇悪だと言いますが、こうなると虎よりはるかに兇暴です。王家荘ではどの家にも病人や死人が出た中で、かの王有常一家にだけは病人が出ませんでした。皆さんがた、どうしたわけかとお尋ねですか？ひとつそのわけを初めからお話いたしましょう。あの日、王有常は小三の病状を看取るや、急いで家にとって返しました。彼は太太タイタイ〔奥様〕に向かって申します。太太、おまえよおくお聴き：

「この村に霍乱病が発生した。吐いて下して筋肉がひきつる。霍乱はもともと伝染しやすいから、今日からわれわれよく気をつけるのじゃ。霍乱は危険な病気だが予防す

る方法がある、予防が十分ならば病気にはかからない。もし不注意で霍乱にかかれば、この病気はおそろしく危険だ。この病にかかれば、十中八九、生命はない。自分が死ぬのは無論のこと、一家全部に伝染する。太太、おまえ病気の恐ろしさがわかったら、できる限り気をつけるのだよ。」

王太太、聞いてすっかり怖くなり、そこでおしゃべりいたします。

この時彼女が旦那に訊ねたのは、「霍乱の伝染を予防するには、いったいどんな方法があるのですか？」王有常は振り向いて、彼の娘秀娟シウケワンに向かい、「兄さんと嫂さんとをこの部屋に呼んでおいで。わたしがお前たちに霍乱予防法を話してやろう。」まもなく秀娟は、兄さんの占元チヤン・嫂ウーの呉氏と一緒に母屋にやってきました。

先頭に来たのは王占元、後に続くは王秀娟。嫁の呉氏は小さい足で歩くの遅く、上体左右にゆすってもおくれます。一同、母屋で席につくと、有常、話を始めました。

「この村に霍乱病が発生したが、これは軽視しておれぬ。霍乱というのは、ひどく危険な伝染病で、たった半日で死ぬという。発病すると吐き続け下し続けで、腹痛は刀で抉られるよう。足はひきつり堪えがたく、意識を失い口中はからから。張家の小三がこの病にかかったが、われらは予防の方法を講ずれば安全じゃ。」

占元が申します。

「霍乱はどこからどうして伝染するのか、お父さま、くわしく話して下さいませんか。」

有常が語ります。

「霍乱をうつすのは、霍乱菌の働きだが、この菌は顕微鏡でなければ見ることはできぬ。病人の大便中にはみなこの菌があるが、食物の上にもたくさん菌があるのじゃ。病

人の糞便をそこらに撒いたりすれば、蠅はそれを見て大喜び。汚いものほど蠅は好き、大群なして寄り集う。ゆっくりたっぷり食べてるうちに、たくさんの病菌が体にくっつく。病菌をつけてあちこち飛びまわり、中にはよその厨房に飛びこむ。厨房中に食物が放り出されたりしていれば、この死神どももまたもやたかかって腹を充たす。蠅が歩いた食物にはすべてたくさんの病菌が残される。物を食べる人が不注意だと、食物を病菌と一緒に腹に納めてしまう。腹の中に霍乱菌が入ると、二三日で発病する。病人は十中九人が死に、いくら身体強健でも無駄なこと。どうだい、霍乱の正体がわかったかね、霍乱菌こそ発病の根源なのだよ。

話のついでにもう一つ、よくよく話を聴くがいい。これまで川に馬桶〔便器〕を流す人がいるが、霍乱病はそれで別の場所にもひろがるのだ。それというのも多くの家では川の水を使っている、病菌がその水の中にもあるのを知らずに。こうして川の水を飲めば霍乱になるのは、蠅が病菌をまきちらすのと同じこと。

もひとつ注意を要することがある、よくよく話を聴くがよい。霍乱菌は病人の糞便中だけでなく、病人の衣服・布団にも着いている。もし病人の衣服や布団にさわったりすれば、たちまち病菌がいくつか手にくっつき、食事の前に手を洗わぬと、その病菌も胃腸の中に入ってしまう。だから言うのじゃ。もし霍乱が発生しても、われら十分注意しておれば安全なのじゃ。」

王有常がこの話をしおえると、傍らの王占元はびっくり仰天。お父さん、お父さん！ お父さん話して下さい、霍乱予防にはどうすりゃいいか、お父さんもっと話して下さい。有常そこで話し出す。

「予防法はべつにむずかしくない。第一に病人の吐瀉物に気をつけて、穴を掘って埋

めてしまうこと。次に食物はすべてよくよく加熱して、生もの、冷え物、生煮えは食べず、食器はいつも消毒する。こうすりゃ病源は防げるぞ。」

王太太が申すには、消毒とはどうすることか、くわしく話して下さいませんか。王有常が申します。

「消毒とは病菌を殺すこと、方法は至って簡単じゃ。田舎では消毒薬を買うのはむずかしいが、お湯を沸かすなら容易じゃろう。病菌は熱湯に出会えばすぐ死んでしまう。おのずと病気もうつらぬわけ。」

有常は病菌絶滅の方法を語ったあと、さらに伝染を断ち切る方法について語りました。

「蠅こそが死神じゃから、こいつらを防ぐことが先決じゃ。食物・飲物の上には蠅帳をかぶせ、厨房には網戸をつける。蠅は見つけ次第に打ち殺し、病気を運ばせないようにする。街で切り売りしている西瓜は買わず、不潔な食物はむろん食べぬこと。生水飲むのは最も危険、煮立てて飲めばまず安心。食前・食後は必ず手を洗い、霍乱菌が手に着かぬようにする。われらの手がもし病人に触ったら、手を洗って消毒するのが何よりも先。一言でまとめて言えば、どこも清潔、いつも気をつけていれば無事。」王有常がこれを話し終えますと、家中みんな心明るくなりました。占元が母親に向かって申します。

「お母さま、どうかお聴き下さい。今後、われら一家こぞってお父さまのおっしゃる通りにして行けば、霍乱がいくら危険でも入りこんでは来れぬでしょう。人は霍乱を虎の群にたとえています、われらは虎退治の英雄、そろって前進いたしましょう。」有常一家の霍乱防衛のことはこままでとして、再び他家のことを話しましょう。小三が死んで一週間もたたぬうちに、小三のおっ母さんも亡くなりました。こうして死者は続々と絶

えることなく、王家荘の哭声は天を覆さんばかり。どの家も子供たちはみな喪服を着、どの家にも新しい墳墓がふえました。村中では十中八九が災難に遭ったのに、かの王有常の

家では全員無事だったのです。この話はここでおしまい、どうかみなさん、決して軽視なさらぬように。

原 文

① 胡阿毛開車入黃浦

九一八事變在瀋陽 我國守邊的將軍徹底不抵抗 聽憑他國聯怎樣處理 誰知又在上海開了戰場 說的是倭奴在上海動刀槍 他打算着仗着武力來要脅中央 那知道中央政府辦事更乾脆 咕嚕々一氣搭車進了洛陽 按下這遷都之事暫且不表 咱先把那上海的戰事細說端詳 有名的能征善戰的十九路軍軍長蔡廷楷 他就準備着和那日本鬼子刀對刀來槍對槍 論和不成開了仗 只見那一團殺氣瀰漫黃浦江 只聽那野砲重砲噹哩咕嚕鎮天價响 呼隆々轟塌了樓舍震倒了牆 那手溜彈咕咚咕咚一個接着一個的响 嘩啦啦連珠不斷的機關槍 天上的飛機飛來又飛去 燃燒彈爆炸處處起火光 把一個巍巍的圖書館燒成焦土 把商務印書館得燒也只剩了四堵牆 也不知道燒焦了多少買賣舖戶 也不知道燒焦了多少客棧民房 槍彈如雨遍地落 炮彈轟擊實難防 無辜的良民不知道死了有多少 說起來不由人陣々淚沾裳 有錢的富人他住租界 無錢的窮人栖々遑々 逃命顧不得親兄弟 說什麼妻子供爺娘 一旦得被日本鬼子捉了去 不是槍斃便是開膛 有的是至死不屈賽猛虎 有得是引頸就戮似綿羊 那殞國的英雄也不計其數 單說這位殞國的英雄他出身在汽車行 此人阿毛爲名胡爲姓 生來一副忠烈心腸 平常裡他原來是開汽車在上海 整天價東奔西馳在馬路上 雖未曾浪跡江湖朝秦暮楚 也算是走遍了上海這個大商場 只因爲近日戰事劇烈那汽車歇了業 胡阿毛他閒得心裡好不悶的慌 一日他就走到大街上去閒躑躅 又誰知却被幾個日本鬼子拉々扯々捉進營房 從他身上搜出開車證 於是乎硬派他把

日本的汽車夫當 胡阿毛他有心不幹 怎奈是寡不敵衆死也無益 無奈何看風使船的把這差使來當 這一日他正載着三個日本軍官往前走 不大的工夫就走近了黃浦江 那黃浦江後浪催前浪 伏々起々浪花兒揚 他一邊開車一邊想 不由得一股怒氣沖胸膈 我往日走來走去在青天白日旗下 爲什麼而今頭上的旗子却換了一個紅太陽 胡阿毛生來是中華民國的一條頂天立地的男子漢 爲什麼日本打咱咱反替他幫忙 更說不定那一天活着那一天死 活着倒不如死了的強 越思越想心中好恨 低頭不語暗打量 汽車裡現坐着三個日本鬼 拚我一個帶着他三個下了黃浦江 管教他未得中國的尺寸領土 先灌他三個每人一肚子湯 主意打定就是這麼著辦 把汽車開足了馬力來在了江橋上 他兩手一轉使了一使邪勁兒 大罵了一聲日本鬼子我入娘 說時遲 那時快 只聽得撲通一聲响 連人帶車就一氣滾下了黃浦江 那江水滔々東流去也 直入大海一望茫々 靈魂當空顯着微笑 拉著那三個日本鬼子去見閻王 可見是這愛國的事兒都能辦的到 不論他士農工商那一行 唸書的振臂一呼民衆齊起 種地的好々耕種備戰糧 作工的餓死也不進日本工場 做買賣的永遠不和日本經商 當兵的武裝同志們更不用說 養兵原來是爲的國防 如果我們四萬々同胞大家聯合起來和日本這樣的幹 那怕他區々三島不滅亡 不滅亡 永莫忘 四萬々同胞大家齊起來抗日爲我祖國爭榮光

歎 朝 鮮

朝鮮亡國數十年 國內人民受熬煎 不言這亡

國事我們還則罷了 要提起這等事怕的我民心
膽寒 想當初朝鮮未亡民安樂 個々都有這自
主自由權 一年四季平安過 家々戶々樂無邊

到後來國家滅亡歸日本 一切的主權領土資
本錢財被人佔 到後來日本對他是何樣 專制
苛政對待十分嚴 帝國主義來侵略 鮮民難受
苦顛連 滅人種最可憐苛捐雜稅一日要完 有
了一個延遲悞 立時槍斃見閻羅 鮮民如有閒
議論 割去了舌頭不能言 親戚朋友不得見
如要走動開路單 過了鐘點不回轉 立被日人
抓進監 一個菜刀十家用 鐵練拴在警察邊
不許鮮人藏鐵器 察着之時一命完 只鬧的家
々無有一片鐵 人民工作十分難 不由得全國
人民齊叫苦 日人聽知又把臉翻 如有哭者立
時死 不然就得帶笑顏 這樣殘暴還不算 提
起行奸最難堪 家々戶々都搜到 挑選民間美
嬋娟 任意奸淫行快樂 鮮人敢怒不敢言 人
家妻子他強佔 人家閨女他強姦 有了一個說
不允 刀挾脖子性命完 全家骨肉一時分散
天倫樂事消滅完 無奈何羣起奮鬥拚命大膽想
造反 可是沒有鎗枝鐵器也是枉然 若被日人
知道反抗事 準必是一個一個刀下殘 衆百姓
無奈都逃散 拋妻棄子舍家園 老幼殘病跑不
動 無奈投河跳井間 一言難盡多少亡國鑑
再回來把我國的歷史談一談 自古來強盛無敵
誰人不曉 各國進貢到中原 不料清朝失敗了

被日賊奪取我國臺灣及大連 近年來日人得
寸進尺貪圖無厭 又佔了東北三省熱河邊 他
想把我國土地全都吞併 與朝鮮印度一樣看
東北同胞現在遭塗炭 被日人殺打姦淫最不堪

各縣人民閒談論 大罵日人暴凶殘 偶被日
賊知覺了 手槍盒子射死我民不知幾千萬 最
可憐東北同胞死的苦 要趕快執戈雪恨救國難

常言道國家興亡匹夫有責 別學那只掃自己
門前雪不管他人瓦上霜的古人言 情願去作槍
下鬼 不作偷生的朝鮮亡國奴才 你要是袖手
傍觀置若罔聞全然不管 將來日賊來到你後悔
已晚 馬革裹尸名傳萬載 爲國殉身理當然
愛國精神人人有 趕快發奮到疆邊 別被那英

美各國來恥笑 說俺民族軟弱不堪 難道我們
民族四萬々 反不如矮賊幾萬千 真可恥來真
可恨 咬定牙關鎖眉尖 一心要把日本滅 死
而無悔心志堅 望我們無論士農工商與那界
快到東北一帶戰場邊 大刀一舉往前趕 不怕
他鐵甲槍刀飛機炸彈視死往前 殺的他雞犬不
留片甲不歸那時心才甘 說到此處佔一佔 我
正要趕到戰場邊 等我得勝回來咱們再細談

小口 大鼓 皇帝夢

人生世上碌碌忙忙 使盡機謀用斷了心腸 好
勇逞強無非是爭名奪利 那管那甚麼天理昭彰
依仗霸術貪心妄想 自持武力專制爲王 不
看那萬里長城今猶在可笑當年秦始皇 他不久
卽滅亡如同是大夢一場 (腔)有那唐堯治世四
海頌揚 舜禪夏禹無道君王 雖然他治水有功
絕不該家傳天下 焉想到湯桀代夏他的國祚不
長 由商紂至元明更換了多少朝代 興敗的原
因不過是強存弱亡 帝制淫威人民不甘忍受
到前清才有革命鼻祖大義提倡 打倒了專制帝
國主義 建立中華共和之邦 優待廢君帝號仍
舊存在 保護私產他的性命不傷 既然遜位不
能在皇城久住當然得出宮另覓宅房 這才移在
天津日本租界 不料想那倭人就起了歹心腸
看他是奇貨可居假意透着親善 陪伴左右時刻
不離身旁 有時出門閑遊散 (腔) 那日兵跨車手
拿盒子槍 明看是跟隨暗却是監視 要用他的
假仁義掩飾列強 日本他垂涎三省可並非一
日 因此上施鬼計把廢帝來誣 他到說我們出
兵去攻三省地 在奉天保你爲新立滿洲國王
(腔)那僞皇聞聽此言甚是歡樂 不由他手舞足
蹈喜氣揚揚 說貴國真要保我做了皇上 情願
意給你們早晚燒高香 他只顧貪心要把皇帝做
實在是醉生夢死不加思量 他也不想世界潮
流共和政體 他也不想君主帝制不能久長 他
也不想背反民國致成罪首 他也不想倭人陰謀
用意不良 利令智昏受了他的晃得兒晃 簡直
的是耍傀儡把他就架弄上了場 (腔)這本是倭
人的奸詐牢籠計 所爲師出有名侵佔邊疆 那

張少帥依賴公理不去抵抗 野蠻的倭人那講大義綱常 他得寸進尺佔了我們遼熱 白白的奉送沒放一槍 思想起來算上了他的當 到如今追悔無及枉自悲傷 鑄大錯於九鼎英雄千古恨 我們努力補牢尙可不能亡羊 (腔上板) 迅雷擊開烏雲散 青天白日放豪光 士氣充滿山河壯 捨死忘生奔前方 長城以下流熱血 炮聲轟破島國亡 嚇得偽皇心膽裂 口中不住叫額娘 只爲貪圖身榮貴 不想今朝受驚慌 罵聲日本心奸險 無故保朕坐龍床 難是面南登九五 不能自主立朝綱 大權都歸日人掌 國事不與我商量 有時我要問一事 必受日人言論傷 跋扈專權如操莽 待我如同朝鮮王 分明拿我作傀儡 假仁假義假心腸 他與民國開端戰 所爲侵佔奉吉江 擴充他的殖民地 進攻退

守設邊防 他若僥倖打勝仗 定把滿洲國滅亡 我不該聽了他人話 我不該自己無主張 我不該爲虎來作倀 我不該出關做偽皇 如今已成騎虎勢 生死存亡命該當 正是皇上心暗想 大炮隆隆振山崗 中華民軍義勇隊 與敵決鬪在沙場 有那民衆團體慰勞會 贈送食品與酒漿 軍人衛國保百姓 百姓禮應助錢糧 禦侮必須設軍備 武力充足國勢張 歐美各國是榜樣 文修武備比我長 大家起來急摹仿 准執牛耳霸東方 只須衆心齊一致 何用滿街瞎嚷嚷 嚷得聲嘶嗓子啞 不如前敵放一槍 萬衆一心惟對外 勿學兄弟鬩於牆 同舟共濟禦外侮 戰勝倭人把民氣揚 (歸板) 我惟盼那戰事告終收回失地 三省平定打倒偽皇 到那時鞭敲金鐃响 凱歌齊唱祝我民國永世綿長

② 義軍女將姚瑞芳

鐵馬秋風花木蘭 拔弧呼殺賊心寒 中原多少奇男子 祇解悲歌不出關 諸位 上面一首詩 乃是近時人爲愛國女英雄姚瑞芳從軍抗日而作的 原來姚瑞芳女士是遼寧人氏 今年還不過二十一歲 生得材貌出衆 志願非凡 從小在學校裏讀書 卽深明大義 對於國家大事 更是非常關懷 不久以前曾畢業於上海兩江女子中學 家中生活 很是好過 平日嚴守父母之命 在書房裏看書報 寫寫文章 或是和朋友們在一塊兒閒談閒談 倒還自由自在 可是自從強暴的日本侵佔了我們的東三省以來 姚女士的態度忽然改變了她眼看著國勢一天衰弱一天 同胞們中真心覺悟的人很少 心中非常悲痛 因此 每天話也不多說 臉也不多笑 整日閒坐在香閣 悶悶不樂 當時難免有人懷疑問道 姚小姐 近幾月來有什麼事情不快樂 終天裏愁眉不展 却是爲何 瑞芳見問 頓然觸動了愁懷 止不住嘆口氣道 唉 我的愁眉不展 你們那裏知道 (唱) 我天不恨來地不恨 只恨中華難生存 中華原是大國 悠久文化無比倫 幾千萬方里

錦繡地 四萬萬同胞共祖人 論物產 絲茶大豆麥和米 談出品 盜品刺繡天下聞 論礦產 山西煤炭大冶鐵 談木材 東三省森林有名聲 記得祖先在世日 中原威風四海尊 漢服匈奴和朝鮮 唐擊百濟喪倭魂 元朝武力真強大 南洋中亞來稱臣 明清初葉威還在 近百年來太傷神 一傷鴉片事戰爭 二傷英法逞強能 三傷倭奴割臺灣 四傷八國攻京城 如今倭奴更兇暴 一夜吞去東三省 吞去三省猶自可 一心還想滅我們 可嘆那同胞之中血氣少 睡夢裏何人能把仇冤伸 舞場前朝朝依然明亮 亮 電院中夜夜仍舊鬧紛紛 私念我女兒亦有救國職 從今起大廈將傾謀支撐 (白) 姚女士的這一番話 真是有心人也 聽者假使有志氣的 一定要感愧下淚設法援助他不暇了 誰知這一班無心肝的亡國坯子 聽見了姚女士的說話 反而大大冷笑 走開去在旁人面前譏諷他道 一個女孩子家 在家裏快樂日子過得不耐煩了 現在也想出風頭 大談起救國主義來了 救國 許多要人們都救不了 你倒能救得了麼 這種說話當然有時要吹到姚女

士的耳鼓裏來的 但是姚女士聽了也不生氣
只是愈加堅決 整天籌劃他的事業 他對那一般人的嘲笑 正是

(唱)笑罵由他來笑罵 蛟龍豈比井中蛙

利吾兵甲強吾馬 好赴疆場衛國家

(白)果然這種話說了不到一月 一個消息傳來
姚瑞芳女子失蹤了 姚瑞芳的失蹤 左隣右舍自然都表示十二分的驚疑 但最難堪的要算是瑞芳的老母了

(唱)姚母聽得女兒失 哭喊姣兒在北堂 姣兒今年廿一歲 從未背母離家鄉 今乃不告他方去 是兇是吉費猜詳 莫不是強被倭奴擄了去

莫不是一時失足在河塘 莫不是朋友留了住 莫不是受騙走他方 千猜萬算疑莫決 還是

姚翁出主張 錢大錢二來 請你二人大連去 吳三吳四來 請你二人奔瀋陽 李伯伯 你到西街問卦去 張媽媽 你到東廟去燒香 合家忙了三日整 三日不見女姣娘 氣壞爹 哭壞娘 外邊走進李傻郎

(白)李傻郎是隔壁王家的小夥計 爲人有點呆頭呆腦 此刻去到姚家 看見老夫婦十分傷心

他不慌不忙的說道 二位老人家慢些着急 後面龍眼池裏你們去看過沒有 前天大清早我到那兒去挑水 看見池裏水浪很大 聲音撲通撲通的响得很利害 我以爲是鬼 連忙逃到岸上 現在想起來 莫非是小姐失落在池裏淹死了 李傻郎的這一番鬼話 在平日姚母是根本不相信的 但而今情急神昏 一聽見傻子的說話 倒也有幾分像真 遂連忙打發李伯伯用一個網到龍眼池裏打撈 李伯伯見吩咐 正要出門 誰知恰巧從郵局送進一對信來 姚母不識字 連忙遞給姚翁 姚翁接着一看 認識是女兒的筆跡 只見上面寫着

(唱)大不孝 瑞芳女 千萬拜上 拜上父 拜上母 年老高堂 小女兒 此番走 情非得已

望雙親 念當初 養育心腸 兩月來 兒心碎 萬難家居 再留下 說不定 病倒在床 並不是 嫌家寒 不甘寂寞 也不是 嫌親老 語短話長 更不是 嫌妹幼 出言無知 尤

不是 嫌弟野 行爲不良 爲只爲 我祖國 大難逼至 東三省 失去了 令人心傷 國有難 坐不救 何以生爲 外敵來 唯一法 死力抵抗 靠國聯 各利己 誰有好意 靠政府 力量單 難云救亡 在而今 只有那 同胞一致 在而今 只有那 共赴疆場 退倭奴

復失地 死中求活 充實力 樹國防 最好主張 小女兒 也是一 國民份子 雪國恥 爲天職 何可坐亡 此番走 志在那 集合同志 上前線 與倭奴 打一死仗 老爺娘 如愛女 請勿悲戚 早祝禱 前線兒 得勝還鄉

(白)姚翁夫婦看完了這封信 方才恍然大悟 心中非常悲傷 但是事已至此 也是無可奈何 好在女兒此走 爲的是救國 乃是很光榮的事 總比情奔奸逃和嘔氣尋死等要好得多了 一番打算 老夫婦心中自然寬慰得多 自後早晚探聽消息 預祝女兒殺敵勝利 那是當然的事 暫且按下不表 現在再談姚女士逃出家門後 究竟如何抗日 如何殺敵 請諸位不要性急 讓我慢慢道來

(唱)瑞芳逃出家門後 途中獨行獨商量

還是單身殺敵好 還是投奔義軍行

單身殺敵力量小 投奔義軍久便當

不如聯絡各同志 另樹一幟攻敵方

主意打定中心喜 前途頓放萬道光

黑山去說同窗友 北鎮去見表姊匡

與城錦西都走遍 邀入女友共十双

十双女友爲基本 再招男友把威張

共同敵人只一個 男友女友豈兩樣

積極籌備二月整 實力雄厚號稱王

初次殺敵石山站 奪獲三架機關槍

再次殺敵溝帮子 死傷倭奴滿山崗

一月殺敵七次整 從未入夢寬衣裳

時值新教六七月 作戰最好青紗帳

青紗帳中英雄聚 開會運械日夜忙

初步計劃商量定 先復錦州後瀋陽

瑞芳擔率攻錦隊 七十士卒勇莫當

深夜達到西門外 馬不嘶來鼓不響

(白)兵馬走到錦州城下 敵方一點動靜沒有

瑞芳悄悄離開陣地 走到城門口一看 只見有三五個守門兵士 正在倚着槍桿大打其睡睡兒 原來錦州自被敵人奪去之後 我國這邊從來沒有人進攻過 敵人就將大部份的軍隊調到北面去攻蘇炳文去了 僅留少數人馬在此駐守 日子長了 故有如此的鬆懈 瑞芳一見 連忙奔回陣地 率領七十健兒 齊向前衝 她的殺敵氣概真好利害 只見她喊道

(唱)前衝呀 同志們 倭奴是我們久仇人 前衝呀 同志們 今不努力待怎生 前衝呀 同志們 快為民族爭生存 前衝呀 同志們 槍口瞄準敵人身

(白)這一仗 真是出乎敵人的意外 措手不及 所有守門的兵士 差不多都在睡夢之中作為槍下之鬼了 還虧敵人發覺得快 連忙把四城門緊閉 未遭瑞芳的兵隊衝進來 不然倭奴們恐怕要 縱然不在刀下死 也要槍下去亡身 不過 這次的大舉襲城 雖然使敵人寒膽 但終因人少彈盡 不能和敵人作持久戰 圍城竟日不下 恐怕敵人的救兵來到 只得暫緩進攻 退守紅螺山再作良圖 諸位同胞 談到這裏 真要使我們傷心

(唱)東三省 義勇軍 誰非好漢 只因那子彈少 糧草不完 天氣冷 衣服單 膚寒肌顫 為國家 拚死命 須向前衝 敵軍多 兵器狠 怎能抵抗 前無援 後無救 違了初衷 (白)姚女士退守紅螺山 整頓軍隊 雖然死傷很多 但精銳還未大失 當下和同志們商議 決定增械添糧 以圖再舉 有一天 他帶了女同志三人 喬裝了乞丐 到錦州去偵察敵情 不料在交通大學附近 忽然遇到日本兵搜查 姚女士不等敵人防備 頓然連開了几槍 打死敵兵兩個而退 及到敵人率領大隊人馬來追 早已看不見他們的踪跡了

諸位 這段事實是去年發生的 現在熱河又被倭奴奪去了 瀋東正在危急萬分 姚女士如還在世 一定更加打起精神殺敵 但是 我們在這裏聽閒話的人 也是國民一份子 國家興亡 誰都有責 單是靠人家去抗敵 那是不成功的 我們也應當及早武裝起來 和倭奴拚一拚 才是 況且姚女士是女子 女子都能上陣殺敵 難道我們男子漢倒反貪生畏死不成 我這封書今天只說到此處為止 息幾天 再來聽聽諸位的好消息吧 再會

③ 說古今 (鼓詞)

說古今來道古今，說個古今大家聽，這古今不說別的事，單表眼前的大事情。

甲午年中日兩國開了戰，日本發動了全國的兵；軍事公債人人都要認，誰勝誰敗老少俱關心。要說起我國來令人真可恨！偌大的一件事却看得很輕。西太后坐深宮慣把福來享，文武百官只把自己利害認得清。北洋水師在黃海裡打了敗仗，李鴻章的老淮軍也敗回了瀋陽城。只赫得文武百官忙把家眷送了走，王公大臣都想丟了北京搬送朝廷。在上的人兒都只為着自己來打算，有誰能念到家破，身亡，妻離，子散的衆黎民。嘆黎民，有多少死在日軍炮火下，有多少逃在中途喪了生，有多少人的家產俱被搶淨，有多少的墳墓也被踏平；受盡了這

些淒涼味兒且不算，成年裡還得挖肉刮骨交納賠償金。李鴻章去求和把『馬關條約』來訂下，割地賠款，開埠置官，免稅通商，設廠製貨與慢撤兵；奪去了朝鮮還不算，再割澎湖，臺灣和關東廳，賠償軍費二萬萬兩，只擠得我國庫空虛萬民貧。這一張賣身契把中國來斷送，從此後，日本如虎添翼想把我獨吞。內閣裡定下了『大陸政策』，海陸軍大臣忙着增兵，單等時機再來到，征服中國獨霸亞東方稱心。偏偏他的時運好，歐洲列強動了刀兵；英德成仇在西歐大戰，更把戰禍往東引。英人想把德國在東方的勢力掃，便和日本把密約訂，只樂得日人哈哈大笑，言道『進攻中國我久有此心，乘機先奪山東地，再來併吞北幾省。』急忙發動了人

和馬，飄洋過海侵入我國境，先從龍口上了岸，轉眼又佔萊州城。橫穿半島往膠州去，幾萬大軍向南行；沿路的城鎮都被佔，只嚇得衆黎民膽顫心驚，糧食草料搜刮盡，鞭打繩拴苦役萬民。佔了膠東還不算，沿着鐵路又往西行，濰縣濟南都被佔，鐵路礦山盡換成日本人。這些痛苦且慢表，霹靂一聲天下驚，『二十一條』逼我來承認，這一個毒辣條件舉世聞名。要山東與南滿和內蒙地面，沿海的島嶼都要併吞。要了北方還不算，更要南方這幾省：湖北，湖南，江西和福建，修路開礦都要讓日本。中國的財政由日本顧問管，訓練軍隊也得聘請日本人。更有一件希奇事，要請日官替我們辦巡警。這些條件要是都辦到，中國便是實亡而名存。這時候我國的總統是袁世凱，一心想坐九龍庭，暗地裏承認了日本的條件，要靠日本的保護立朝廷。自古來在上的人兒都只重私利，誰能把國家人民的利害記在心。袁世凱勾結日本把權利輕輕來斷送，給中國留下了無窮的禍根。這些個傷心事暫且慢表，再說說近幾年來的大事情。

民國十四年我國起了大革命，各界人民齊了心，罷工罷課並罷市，出糧出夫又出兵；要把列強的勢力趕出中華地，並把那北洋政府一掃平。廣東成了革命根據地，在這裡練成了北伐軍，十萬雄兵分道北上，無數民夫奔前程，在東南五省趕走了孫傳芳，兵進湖北佔了長江的中心。碼頭夫憑槓子收回了英租界，農民都起來打那土豪劣紳：陝甘兩省也都鬧革命，河南的『紅槍會』趕走了奉軍。只嚇得那洋大人倉皇失措，只嚇得那達官貴人膽顫心驚。這個說『老百姓造了反』，那個說『奴隸們變了心』；『照這樣下去那還了得，豈不是人民翻身中國復興，到不如及時早下手，撲滅革命莫留停。』列強的主意俱已商定，威脅利誘分頭進行；拉上打下手段高妙，壓倒人民不容情。自古常言道得好，『物必先腐然後蟲生』；這個說『你的要求太過火』，那個說『爲什麼空說不實行』；這群人不滿那群人的意，越鬧越兇自起紛爭。

黃浦江上風雲變，洞庭湖中波浪興：功敗垂成真可嘆，只樂得洋大人歡笑連聲：『這會兒我可就不怕了！算一算誰得誰失誰最稱心？』各國的利益全都保住，日本還要單獨進行：趁機發兵到山東地，阻擋南軍往北行。民國十七年五月三日，濟南城頭動了刀兵，多少人民被屠殺，外交官既割鼻又被挖心。這一段傷心事誰不知曉，再說到往後的事令人更心驚！

日人自從佔了朝鮮後，經營南滿不留停：關東軍，關東廳，滿鐵會社，從軍事與政治和經濟分頭進行；專等時機再來到，獨吞滿蒙方稱心。民國二十年九月十八夜，瀋陽城邊大禍生：轟隆隆大礮連聲響，嘩喇喇鐵騎如飛行，呼嚕嚕飛機憑空降，勃騰騰戰車滿地滾；炸死了我們的多少老和幼，轟塌了我們的多少屋和城，拆散了我們的多少母和子，燒燬了我們的多少戶和門。佔了這裡再奪那裡，我們那守土的軍隊却只會撤退不留停。都只爲『不抵抗主義』上行下效，因此上才憑空丟了東三省！將軍逃了還有官在，只苦了成千百萬的衆黎民，人人有家歸不得，冒險歸去有死無生！

自古道『得寸進尺』人心同此理，因此上他又催動人馬往西行。先奪熱河更取察哈爾，拿到綏遠再攻寧夏城。這一種併吞滿蒙的計策真高妙，華北各省盡在掌心；若還得了中國的大半個天下，再南取三江兩湖與粵閩。莫道敵兵還離我遠，轉眼大禍便來臨。前三年長城各口一場血戰後，眼下綏遠又動刀兵。長城戰爭多英勇，弟兄們殺敵不留情；只殺的鬼子屍橫遍野，只殺的鬼子哀號連聲。都指望一鼓作氣打回東北去，誰料想政府的外交又辦成！外交官在塘沽舉杯相慶，弟兄們從前綫揮淚撤兵。這一段傷心事誰不知曉，再表一表『平津演習』的大事情。

自從長城撤兵後，『冀東又把政府成』；二十二縣非我所有，日軍又大批的開到平津。先在豐台趕走了我國的軍隊，霸佔住鐵路不讓通行。在天津修營房廣招工匠，工程一完將工人都丟在大河心，這些人都是我國的男兒漢，誰

無爹娘與妻身；從此後身葬魚腹寃沈海底，拋下了爹娘妻兒依靠何人！上千家的苦主號哭晝夜，眼看着鬼子的勢大『何處把冤申』！真個是『禍不單行福無雙至』，鬼子又在平津大興兵。沿途抓夫並索糧草，不分老幼與弱貧，拉去民夫運軍火，住佔民房作兵營；佔據房屋還罷了，更將多少房屋盡削平；削平房屋還不算，又把那地裡的莊稼都掃清；馬蹄步步踏的都是心頭肉，戰車滾滾碾塌了多少舊墳塋。彈彈穿的是祖產父業，礮礮震得人膽戰心驚。眼見得鬼子兵遍地都是，老弱的黎民向『何處逃生』！人言道『這次還只是假進攻』，又誰知『什麼時候要弄假成真』！就這次『假打』人民已經受夠了苦，到那『真幹』時更將如何的傷心！

這裏的礮聲纔息了，綏東又報烽火驚。李守信王英作前哨張海鵬的大隊後面緊跟，還有德王卓什海，率兵更從綏北行，東北四路齊進攻，一心要奪綏遠城。這些個禍國殃民的漢奸把先鋒來當，鬼子兵却在後面指揮督戰不留停。更有那太陽飛機在空中來轟炸，那管你是官兵

或平民。飛機上拋下了燃燒彈，只燒得遍山遍野火熊熊。前線上弟兄們決死戰，黎民百姓也橫了心。齊心努力往前攻，奮勇殺敵不留情。前幾仗將敵人殺敗回去，大戰眼看就來臨。

常言道『兎兒急了也會咬手』，難道說『萬民百姓就不能齊心』！眼看着國亡家破種且滅，到那時再想翻身却不能。起來吧呀起來吧！快快奮起莫留停！拿出自己的力量來幹，拿出自己的刀槍和敵人拼。莫望政府把交涉辦，莫望那國能打『抱不平』；更莫再把天命信，也莫直會忍受不作聲！那一次的交涉我們曾把便宜估，那一次的條約不令人傷心！從來救自己都全靠自己，解放的重擔子還靠自擔承。後援會，義勇軍，加入前線和敵人拼，不只要守住綏遠地，還要更攻進長春城，把倭奴打回東海去，把洋大人都趕出中華境。到那時節有福才能自各兒享，妻兒老小才能歡聚在一門庭。

這一回我把古今來說，願衆位趁早起來努力奔前程。

④ 平倭記

話說明朝嘉靖年間，東洋倭寇，來中國作亂，害得我沿海七省，人民塗炭，鷄犬不存。那時節多虧當兵的愛國，老百姓齊心，費了十幾年的工夫，才剿滅了海寇，殺清了倭奴，大家重又過着太平日月，諸位要知詳細，就請穩坐兩旁，聽在下慢慢說來：

大明朝嘉靖年浙江地方，有一家財主名叫劉芳，家住在杭州府錢塘縣，錢塘縣東門外的劉家莊。他年紀不過三十以上，娶了個妻子叫張四娘。張四娘生的好模樣，知書識字品行也端莊。他夫妻居家過日子多和美，生了個小男孩兒叫阿強，這一天來了個朋友名叫李旺，他特意前來看望劉芳，劉芳一見趕緊往屋裏讓，他端茶敬客談起了家常。劉芳說：你不在定海做買賣，有什麼事兒回轉家鄉？李旺說做買賣我怕海賊搶，這些時倭寇鬧的太猖狂！大

船小船全不敢走，定海縣的人心更着慌。那地方離海太近風聲又不好，因此上急急忙忙我回轉錢塘。劉芳說：到底這倭寇怎麼樣？請你對我說其詳！李旺說：倭寇就是東洋小鬼，九州三島是他們的家鄉。聽說是長得樣子同我們相仿，本來是中國人的後代跑到了東洋。就只是野蠻東西不說理，意毒心狠賽虎狼，一把短刀隨身帶，殺人放火海外稱王。常言說：沒有家賊也勾不進野鬼，這家賊的頭目本姓汪。他本是安徽省徽州人氏，姓汪名直一個大流氓。他手下帶了一批地痞無賴，駕船過海到過東洋，先不過勾通外國做買賣，到後來公然成了海上王，招一些亡命之徒徐海陳東做大將，勾結着倭奴頭目多田大島屎亮郎。佔據着豐前豐後通明巨甲三十六島，造了些兵船戰艦名叫大聯舫。定海關要是不能把他擋，咱這裏十萬黎民要遭

殃。劉芳說：大明朝有的是兵和將，那怕他小醜來跳梁？他要來搗亂咱就抵抗，管教他半隻賊船也進不了錢塘江。李旺說：平日裏既不下操又扣軍餉，老弱殘兵拿不動刀和槍，靠他們有點兒靠不住，咱弟兄還是應當早提防。他二人你言我語把話講，那一旁急壞了張四娘，四娘說：事到如今怎麼辦，我嘍咚嘍咚心跳的慌。劉芳說：婦道人家沒膽量，事情還沒來你就着慌。說話間李旺告辭他們送走李旺，夫妻二人接着商量。一宿說話直說到大天亮，還是想不出好主張。過幾天聽說倭寇的賊船到了烈港，又聽說游仙寨的百戶已經陣亡，又聽說：倭寇佔了溫州台州黃巖縣，又聽說：倭寇已經到了錢塘，又聽說：錢塘的指揮打了敗仗，赭山以上一命亡。劉家莊的人要跑也沒處跑，猛然間來了倭寇一大幫。張四娘躲在床下不敢出氣，懷裏抱着小阿強。劉芳急忙把牆上，上了牆後又上房。只聽的人喊狗叫鬧一片，滿街上刀槍的聲音響叮噠。只聽得倭寇進了自己的院。只聽得床底下搜出了張四娘。只聽得張四娘口口聲聲叫饒命，只聽得哇呀哇呀哭壞了小阿強。只聽得箱籠櫃子連聲響，那倭寇要了銀子要衣裳。他這里又是急又是恨，只聽得一羣倭奴搶走了張四娘。

那劉芳藏在房上，一則躲避危險，二則放心不下妻子，在那裏聽着動靜。起先聽見倭寇們進得院來，各屋裏搜人，果然把張四娘搜了出來。聽他們要金銀財寶，要衣服首飾，四娘不說，他們就砸毀了鎖子，翻箱倒櫃的鬧起來。亂了一陣之後，想來是東西到手了。就又逼着四娘同他們一塊兒走。四娘那裏肯依。無奈一個婦道人家，那裏敵得過一羣強暴的賊寇，擡的擡，拉的拉，早把她擁着走了。

倭寇搶走了張四娘，急壞了劉芳氣炸胸膛。他這裏正要邁步把房下，要進屋裏看端詳。忽聽得門外人聲一片嚷，趕緊又爬倒把身藏。左一思來右一想，思想愛妻張四娘。此一去不受污辱難免把命喪，無情棒打散了好鴛鴦。眼看

着恩愛夫妻不能保護，淚珠兒滾滾洒下胸膛。這劉芳想了好一會，拿定主意要找張四娘，連爬帶走前邁步，走過幾家宅院爬過了幾道牆。有幾家嚎啕大哭和死了人一樣，有幾家空空洞洞像個祠堂，有幾家血淋淋的屍首院裏躺，有幾家小孩子喊爹又哭娘，有一個十七八的姑娘上了吊，沒穿着褲子撕破了衣裳，到一家花園外邊他停住脚步，面前擋住一道牆，手扒在牆縫上住裏望，亂哄哄一院子年青婦女好像一羣羊。一個個披頭散髮不像人樣，一個個哭哭啼啼淚兩行，有一羣倭寇嬉皮笑臉把人撲，按倒在地剝衣裳，這一旁按倒了七八個，那一旁按倒了三五雙。差一點沒把劉芳氣炸了肺，瞪着眼直找張四娘。看了多時一個也不像，也沒一個抱的小孩像阿強。眼看着天氣已晚黑夜來到，找不見四娘母子在那方，他重又上房四面望，劉家莊上起了火光，着火的倒有十幾處，剛才那一座花園也冒起了紅光。

那位說：不是有一羣倭寇在那裡強姦婦女麼？爲什麼又放了火呢？是呀，他們糟踏了婦女，也並不帶走，仍舊放一把火，統同燒死。你說這班倭寇多麼殘忍呀！

那劉芳左面望來右面望，低頭自己定主張，有心回家又怕投入了羅網，要逃命還是投奔他鄉，眼看着此地成了戰場，顧不得妻子同阿強。趁这天黑好逃命，他三步兩步下了房，轉彎摸角往前跑，一口氣跑出了劉家莊，走了一處又一處，到處是倭寇佔着村莊，殺人放火跟劉家莊一樣，找不到親戚朋友在那廂。倒叫劉芳沒主意，思來想去不如把兵當。正遇着一家官軍招收義勇隊，那劉芳從此換了戎裝。他決心要替四娘阿強把仇報，更要替受害的同胞除虎狼。他們的上級官長是一位參將，愛國男兒蓋世無雙。衆朋公若問他的名和姓，那就是鼎鼎大名的戚繼光，善曉兵書會打仗，四川定遠有家鄉。世襲的武官登州衛，這一次爲平倭寇來到浙江。頭一仗大敗倭奴在烈港，只殺得倭寇个个沒躲藏，只殺得漢奸汪直抱頭鼠竄，離開了浙江跑到東洋。他跟着總兵俞大猷，在浙江金台三郡

常駐防。他看見金華義烏民性强悍，組織起義勇軍保衛家邦。教他們種種戰術勤操練，每人一本平倭小冊帶身傍，萬惡的倭奴怎麼樣作亂，都在那平倭小冊上說的詳。說的是倭寇作亂太猖狂，沿海七省遭了殃，來了就把東西搶，強奸婦女燒民房。殺人如麻百姓苦，佔了許多好地方。從打稽山到錢塘，回頭又過曹娥江，燒了嘉興和嘉善，又燒海鹽龍王塘，溫州台州海門港，到處倭寇似虎狼。許多地方說不盡，再把官兵說一場，宋千戶戰死在孟家堰，趙百戶百家山前一命亡，周都司沈家河上把命喪，任愈事自刎在吳淞江：這都是民族英雄好榜樣，保國衛民姓名香。兵士們受了訓練人人發憤，一个个勇氣百倍要爭強，上陣殺賊精神壯，不怕死也不怕傷，接二連三打勝仗，戚家軍的威名天下揚，只殺得倭寇心膽喪，望影而逃不敢抵擋。那時節七省總制胡宗憲，運籌帷幄徐文長。還有那率領義勇軍的一員將，那就是妻喪子亡的錢塘劉芳。他因為招集民軍功勞大，人人稱贊姓名揚！決勝疆場的是那一個？就是那身先士卒的戚繼光。反間計擒了陳東和麻葉，穩君計殺死了徐海在東沈莊，又誘那汪直投降上了綁，法場上斬了徽州王。常言道：蛇要無頭就不能走，這一回倭寇着了忙。好一個愛國男兒戚繼光，殺倭寇好比猛虎趕羣羊，大戰場小戰場，百戰百勝勇不可當。雁門嶺瓜陵江，有一回大戰在龍山旁。戚家軍手使竹竿長有兩丈，竹竿頭尖稜稜的勝過刀槍，還有噴筒能噴石灰粉，噴出來一片白色烟霧茫茫，只噴得倭奴兩眼難睜看不見，竹竿一到把命亡。戚將軍手斬倭奴十員將，那倭寇死亡殆盡活的也

帶傷。戚家軍齊把得勝歌兒唱，浙江省的倭寇一掃光。

戚將軍人不離鞍，馬不停蹄，帶領着一萬人馬，全都是愛國健兒，南征北戰，東擋西殺，把七八萬倭寇，趕盡殺絕。浙江一省，從此太平無事。想不那不要命的倭寇，又從海外擾害福建去了。

浙江有了戚繼光，倭寇不敢來逞強，賊心不死又往福建闖，佔了興化動刀搶。告急文書直往朝廷裏上，嘉靖皇帝趕緊又調戚繼光。那倭寇在橫嶼扎的營寨，戚家軍一來給他個冷不防。離着賊營不到五里路，安鍋造飯吃乾糧，不多時傳下將軍令，殺賊就在今兒個晚上。五千人前去偷營寨，五千人埋伏在雁翎塘，偷營的手裏拿着兩把草，隨身帶着引火的硫磺，埋伏的都帶上弓和箭，十个官長帶上十个梆。三更一過沒月亮，分頭起身急又忙，偷營的走到壕溝先放一把草，不聲不響賊不防，走到了賊營跟前把火放，喊聲大振倭寇着了慌，直以為天兵天將從天降，爬起來就跑找不見刀和槍，戚家軍殺賊好比砍瓜切菜，一个个好似猛虎下山岡。那倭寇死了一半跑了一半，這一半跑在雁翎塘。雁翎塘梆子響，燈籠火把似飛蝗，算起來倭寇沒有走脫一個，大破賊巢斬了首級二千雙。戚家軍乘勝往前闖，六十座賊營一掃光。收復了福清牛田興化府，又在那仙遊漳浦排戰場。斬草除根把倭寇殺了個盡，兩三萬倭寇全死光。東南七省永不鬧倭寇。戚繼光萬古留名姓字香。請同胞思一思來想一想，我中華如今誰是戚繼光？

⑤ 文天祥（單弦牌子曲）

[引子]兩國交鋒，最可慘是城下結盟；漢奸貪利，賣國求榮；試看那南宋亡國淒慘的情形。

[數唱]宋恭帝德祐二年，元朝兵攻打皋山，帶兵的伯顏元帥，把中國人來摧殘。皋山在杭州的東北，離杭州路程不遠；杭州是宋朝的國

都，那時節名叫臨安。已竟是兵臨城下，真可算將至河邊。既沒有強兵應戰，更沒人把守城垣，要想那遷都避亂，已竟是無法再搬。這時候只有講和，說什麼割地賠款！第一次講和的使臣，呂師孟和他叔父文煥。這使臣只知媚

敵，全不以祖國爲念。第二次賈餘慶作祈請使，三個人狼狽爲奸。

呂文煥是秦檜的後代，過繼到呂氏膝前。前幾年作過使臣，送金珠到過北番，鑽門子認識了伯顏元帥，因此和元朝有些關連。這一次又作使臣，借機會正好撈錢。他說宋朝快亡國，運動伯顏也好在元朝作官。呂師孟是又文煥的姪兒，賈餘慶是呂師孟的親眷，他二人本是郎舅；賈餘慶能隨機應變，他三人到番營來講和，其實是來運動伯顏。那伯顏也利用他三人，當作了滅宋的引綫。他三人不管旁人笑罵，一心想只想作官；替伯顏謀劃主意，說有個人必須妨範。此人姓文叫天祥，在江西掌握兵權，新近帶兵來勤王，封爲信國公右丞相獨掌朝班，若不將此人除去，想滅宋是難上加難。那伯顏聞聽此話，不由得心中展轉，怎樣才能除去此人？也好得宋室江山，呂文煥說元帥放心，小子我有個意見，何不叫我們丞相親自出馬，要講和須到軍前，若不來便不能講和，立刻就攻打臨安。

使臣來往把條件權商，縉紳大夫着了慌忙，元兵要我們當國丞相叻（太平年），誰能不怕死，虎穴走一場啊！（太平年）左思右想無計主張，還是告奮勇的文天祥，他本是新封信國公的右丞相叻（太平年），先是江西安撫帶兵來勤王（年太平）。自己爲救國，暫辭右丞相，以資政殿的學士出使番邦，來到了番營全無懼色叻（太平年），當面責伯顏失信，罵呂文煥賈餘慶等賣國辭義慨慷（年太平）。

文丞相到了番營，見了伯顏問分明，兩國講和有使臣來往，你叫我前來爲何情？伯顏開言說你是聽，如要講和不難成，自要你皇帝肯稱臣下，叻（太平年），可汗封他一位國公啊（年太平）。文天祥把話聽清，叫聲伯顏你是聽，講和本是兩國的事，叫我們稱臣萬不能！有言在先說得清，我來講和是兩國不想爭，你今爲什麼變了卦叻（太平年），人而無信是怎能成？（年太平）伯顏聞言冷笑連聲，你信釜中之魚還逞雄，殺你不過是一句話，也就像是輾

個臭蟲。只問你稱臣不稱，少一遲延把命傾。天祥一看情形不對，不由心內吃一驚，暗想要是答應了，豈不是國家亡在我手中，此時要是不答應，立時喪命在番營，我若一死不要緊，於國無益又無功；忙說我國使臣今何在？何不請來一同論此情？伯顏點頭說也好，扭頭回頭叫小兵，快請呂氏叔侄和賈餘慶，中軍帳來論軍情。少時稟報說請到，天祥一看心大驚。三人爲何都換了打扮，元朝服裝一身青。三人走進中軍帳，對着伯顏把禮行，回頭看見文丞相，只一舉手打一拱，伯顏上坐說罷了，一旁坐下議論軍情。降不降聽他一句話叻（太平年），他要不降我立時就攻城（年太平）。賈餘慶開言說不可，等我問問丞相怎樣行！轉臉開言叫丞相，小弟言來聽分明，我國已是沒辦法，何不投降大元另立功？回去先捉皇帝獻給元帥，可汗必定封你一個國公。你看我們三人多榮耀，都是元帥的好恩情。天祥一聽賈餘慶的話，氣得頭昏眼花五內皆崩。說天地間生你們無恥之輩，豈不知一時榮耀千古罵名？你們是中華民族遺留的種，怎麼甘心降賊忘了祖宗？似你這般活着有什麼勁？不如死了到乾淨。罵得賈餘慶無言可對，呂文煥一旁出了聲，說識時務者爲俊傑，你懂什麼叫英雄？死在眼前你還不知道，國破家亡活不成。天祥聞言哈哈大笑，俺要怕死不來番營。誰似你等無恥之輩，只知賣國來求榮。呂師孟年輕性情暴，尊聲元帥聽分明，何不傳令將他斬？急速進兵去攻城。伯顏元帥微微笑，說像他才配稱英雄，你們宋朝人人要都是這樣，本帥也來不到臨安城！一句話說得三人垂頭喪氣，倒把丞相顯得英雄。文天祥怒目橫眉接着寶劍，坐在一旁氣哼哼，忙對伯顏說元帥，宋元兩國本是弟兄，這樣奸臣人人殺得，你要殺了他們我感盛情。伯顏只是笑不語，呂師孟站起氣勢汹汹。拿刀要把天祥斬，天祥大罵不絕聲，說漢奸勾引番奴真可恨叻（太平年），千年萬古留罵名（年太平）。

伯顏大怒就要上綁，文天祥一旁笑洋洋，

說兩國相爭不斬來使(吓叻哎叻)，你就是殺了我也不能算強。中國像我這樣的有好幾萬萬叻，一個個磨拳擦掌是寧死不歸降。伯顏無奈，帶怒坐一旁，那邊閃出唆都和信世昌，說元帥息怒聽我講，千萬不可殺這文天祥。既是賈餘慶去朝見可汗，何不拘他回北方？掠到北方拿他作押賬(吓叻哎叻)，有我二人監視他料也無妨。

那文丞相，暗自傷慘，想要回去是難上難，本想一死赴國難吓叻，又一想何不學蘇武李陵的暫時屈辱且偷安。再說我探聽了敵人的虛實得空我還能跑，有了機會再恢復中原。這天走到鎮江唆都他們喝醉了酒，那文丞相乘機逃走是連跳帶顛。一口氣跑了一整夜，一路之上苦不堪言，深一脚來淺一脚，混身泥水鬼一般；一路都是瓦礫場，走了幾十里才有人烟。到真州去見苗守備，苗再成一見喜笑開言，說兩淮的人馬足以打仗；只有個問題在裏邊。兩淮的總兵不能合作，浙東總兵李廷芝和浙西總兵夏貴素有挾嫌。雖然你老先生知道北兵的虛實是個機會，他們不能合作也枉然。兩人都有兵權勢力大，要想吞併獨自掌權，忘了國仇全不管，一心只想報私冤。天祥聞聽這件事，說我何不給他們解解冤？文天祥正要去找夏貴，不想傳來許多謠言；說天祥已降元朝了，回到江南來做漢奸，因此兩淮總兵都閉門不理，任你說破嘴唇也枉然。

浙西總兵只是不理，浙東要拿天祥殺漢奸。吓得天祥趕緊跑，一路上渴無飲來飢無餐，無奈乞討向前走，誰見過宰相要飯兒真可憐。不敢說出真名姓，晝伏夜行向前趨。北兵也拿南兵也捕，荒野野店把身安。一天走到淮水上，沿江一帶都是民團，天祥只顧向前走，一個老頭兒來到跟前，對着天祥仔細看，說哎呀！你老爲何來到江邊？國軍北軍都拿你，性命就在呼吸間。你老趕快跟我走，暫到我家把身安；走到村頭兒茅舍裏，老頭兒行禮便開言：老丞相爲何來到此處？天祥睜眼仔細觀。原來是丞相府的中書老官吏，因爲逃難到此間。

天祥忙叫老同事！你可知我流落番營這些天？從鎮江連夜逃到此地，打算約集人馬復中原。不想兩淮總兵有意見，忘了國仇顧私冤。又把敵人的謠言信，楞說我來作漢奸。李廷芝帖出告示來拿我，我更名改姓逃到此間。打算招集民團救國難，各處人民聯合抗北番。老中書聽罷一聲長嘆！叫聲丞相聽我言：江浙人民都是好漢，守望相助有民團。話說的投機書要簡斷，聯合了民團人五千；暫保村莊守望相助，且等調齊各路恢復中原；贈給天祥盤川和一匹馬，他又往高郵去順說民團。一路滬江、四明、天台是浙江地，民團編了七萬八千。又往永嘉路上走，對面來了巡邏的船。天祥一見沒處兒躲，連忙就往竹林裏鑽。竹枝扎得渾身是血；幾乎扎死在河灘。直在泥裏爬了半夜，桂公塘土圍裡把身安。天還沒亮又有土匪過，一路燒殺四處冒烟。幾乎死在土匪手，不願生死的跑向前。又往海陵高沙把民軍練，又從如皋到海安；三四百里連夜走。聯合志士和民團，民軍聯合一共十餘萬，願隨丞相抗北番。抗敵復興還是民氣大；豁出一死氣浩然。

[白]人要有至大至剛之氣，沒有不能成的事。文丞相一心爲國，受盡千辛萬苦，終久把十幾萬民團編成了忠義衛國軍，和元兵沿江轉戰，直打了兩年之久。雖然是文丞相精誠團結，其實也是人民的人心不死。十萬民軍人人都知道國家興亡匹夫有責，所以元兵大元帥伯顏雖然勇猛，元兵雖然凶悍，用盡了全國兵力，兩年的功夫，都沒有打敗民軍，反被民軍連次打敗，不敢向江南進兵。

誰知這時朝中又有人主張和議，只得停戰。那呂文煥又，教給伯顏要求宋朝解散民軍。宋朝受了漢奸的威嚇，不敢不照樣辦理，便下了命令，叫文天祥解散民團。文天祥無奈，只得照辦。那十幾萬民軍，不能爲國效力，只得回到本鄉去保守村莊。

[唱]這一天丞相傳齊衆將官，痛哭落淚把話言，說朝中又有講和的事，命令老夫解散民團。我想各保村莊也是大事，只把國仇放在心裏邊，

愛國心腸永不變，那時都能收復中原。我和諸君心一樣，這十萬兒郎心一般。說的將也哭來兵也泣，一陣哭聲震動天。十萬民軍歸田去，保守村莊得平安，元兵雖是厲害得很，幾十年也不敢惹民團。這是後話且不表，單說丞相把朝還，二十名親隨在後，不想中途旅店又遇漢奸。呂文煥的弟弟呂武煥，帶着全家去降元，心想正沒有見面禮兒，一見天祥喜心間，把他拿往去見可汗，一定封我一個大官。假意殷勤來拜望，說丞相今天把朝還，小弟備酒慶賀你；吩咐立刻擺酒筵，暗令家將人半百，捉拿親兵莫放寬。

二十名親兵忙敵擋，五十個家將向上湧，倆拿一個兒多容易，一齊拿住縋在店中。縋着丞相放在車上，用馬駝着親兵二十名。呂武煥耀武揚威向前走，直奔梁山番邦營。押着丞相去見伯顏帥，伯顏還是笑臉迎，說文老先生你真是好漢，人人都像你宋國怎能傾？可汗久聞大名要請你去，就請立刻便起程，鐵練纏身把囚車坐，營前斬了親兵二十名，丞相一路心暗想，此去刀砍斧剝我不心驚，但願早早治死我，

成全了我一世英名，一天到了北京地，因在黑屋子裡並不加刑。可汗派人來勸告，勸他歸降他不應。可汗一怒送到牢獄，終日和囚犯作苦工；要想死又死不了，要想活又活不成。有時想起從先的事，不覺兩眼淚縱橫。只我一人民軍十萬，愛國心腸在腹中，要是全國都這樣，江左偏安事可成。我今失敗不要緊，可惜民軍未成功，民軍未成有民氣在，固守村莊不投誠，國破家亡民心不死，漢族終久可復興。轉眼就是四年整，作篇正氣歌來表心情，歌道古人多少節烈士，各個萬古留美名：張良報國把始皇打，後來終是滅了秦。蘇武牧羊是好漢，不降北番多光明，冰天雪地十九載，終久回到漢京城。我死屍首擲在陰溝內，骷髏骨慢糟朽無踪，死後的事我都不怕，因為浩氣在胸中。唱完文天祥的一個小段，可知民族正氣永無窮。諸位若是不肯信，閒來沒事逛北平，走到東四牌樓北，府學胡同看分明，孔廟旁邊祠堂好，文丞相祠寫得清，元朝此地名柴市，丞相殉節就在柴市中。

⑥ 工人苦

河南省有個歸德府，歸德府夏邑縣有個鍾家莊；鍾家莊上有個種地戶，他的名兒叫鍾華光。華光有老父並老母，娶了個妻室她姓湯；湯氏女生下了兩男並兩女，這一家八口住了一所房。北房裡住的是二老，還有小孫女她姐兒倆；西房裡住的是華光夫婦，帶着兩個小子和老牛在一個屋裡躺。白日裡小兩口兒去鋤地，小兒兒倆也忙着把柴火扛；老夫婦在屋裡捻麻繩還打草帽緘，小姐兒倆也忙着煮糊拉湯。到晚上湯氏還要紡線並縫補，一夜做到大天光。像這樣辛苦勤勞該得好過，又誰知忽地裡降了禍殃。淮河發了很大的水，人口牲畜一齊洩；華光夫婦拼命救出了二老並兩小，那一兒一女却把命喪。地裡灌滿了大水深三尺，再上那兒去找棒子與高粱。逃出了活命算是倖倖，肚子

裡餓得確實難當。沒奈何在山上找了些樹皮並雜草，煮起來大夥兒吃，那還問乾淨和骯髒。眼巴巴地望着大水慢慢退去，實指望種下麥子好收個滿場。誰料想老父身得重病，既沒錢醫治，那有什麼吃的來調養？連病帶餓過了十天不滿半個月，他兩眼一閉命喪亡。眼看着死喪在地無錢埋葬，他只得苦苦哀求告貸四方。常言道「雪裡送炭」世間少有，怎當得親戚鄰里又都遭了大災荒；求來求去沒人過問，他只得急煎煎的賣地又把人告狀。有錢的主兒「挑肥揀瘦」並把地價來剋扣，托住你脖子卡住妳的嗓；出着賤價把那七畝地連青來賣，那管他母子哭斷了腸？死的葬了活着的還要養，剩下的那塊瘦地不足二畝廣，眼看着黃葉落盡大雪紛紛下，小子喊肚餓，女兒又把寒來嚷，

老娘沒氣力把炕下，妻室也不住地往炕裡邊躺；華光眼看着這般光景傷心落淚，扭着那破屋子費思量，沒奈何再把牠來賣，換些個米糠豆麵暫且混時光。真個是「禍不單行，福無雙至，」官府裡偏偏又來催錢糧，拿票的差人兇惡賽猛虎，爲派「軍需捐」又來了村長；今日要來明日逼，鞭打繩拴還要拉了上公堂。萬般無奈把妞兒來賣，賣了女兒完納官府的捐款和錢糧。他本是一家八口父母全在，到如今只剩下男女老少共兩隻。娘兒們悲悲切切把那九九寒天來渡過，到春來，耐得了身上的冷，肚裡却餓得實難當；生方設計把東西都賣了個罄盡，眼看着還要餓死不能吃新糧。多分是老老爺不絕人之路，却來了招工的那一幫；說招工往青島去，到那裡進工廠把紗線來紡。『左鄰右舍都把名報了，要到那大地面去走一趟；勝似餓死在鄉村小地面，掙不下銀錢總可以混到棒子和高粱』。華光對湯氏說了一遍，再和老娘把這事兒來商量；老娘有心不放他前去，『眼睜睜一家餓死有什下場？倒不如放了我前去，捎回銀錢來也好度時光。』華光道罷老娘應允；含淚辭母跟着衆人遠走他方。

一路行程來得快，火車載來了他們這一大幫。華光一路把眼四處張望，只見那街兒又寬又長又放光，滿處立着的是高樓大廈盡都是堂堂皇皇。轉彎抹角越走越近，不覺來到東洋紗廠。太陽旗在高桿迎風飄蕩，黑黝黝的煙囪兒樹在那廂，還有那汽笛嗚嗚怪叫，一聲聲直叫得人膽顫心慌。那一座鐵門兒真宏敞，好似餓虎把口張，活生生的把大夥兒吞將進去，却又見監工立在這旁；他直管惡狠狠的把人來張望，不由得華光低下頭來暗自思量：「却怎的這般陰森相，好一似入了官衙上了公堂，越思越想越害怕，忽聽得一聲怒吼，只嚇得他氣塞胸膛。猛擡頭大踏步往前急走，一掌打得他踉踉蹌蹌，連忙把雙足來立定，那工頭却惡言惡語把人傷。華光低頭那敢出一口大氣，只覺得臉面發燒似火燙。監工吩咐已罷揮了揮手，華光跟着衆人上了名子、領了銅牌、進了工房。從此後華光

便在東洋紗廠把工做，每日裡流着血汗受着悽惶。

第一年在廠裡把粗工做，第二年要學紡紗又把學徒當。一年一年做下去，說起那苦楚來氣塞胸膛：天沒明在汽笛聲裡把廠進，深更半夜才得出廠。每日裡隨着機器轉，只轉得頭腦眼花神魂飄蕩。終朝戰戰兢兢把機器來守定，怕的是一不留心牠把人傷；軋斷了胳膊切斷了腿，只算是你命裡活該自遭殃。傷了身體誰來問，成了殘廢便趕出工廠；流落在街頭沿門乞討，餓死在道旁誰關痛癢。每日裡作工都有一定的數，少了一條線也得賠償；出廠時要在你的身上翻過一遍，說是「爲防偷盜搜賊贓」。在廠裡有工頭、稽查、監工把衆人管，那大肚皮的廠主也不時地來走一趟；洋大人俱都是喜怒無常，手裡拿着個「打狗棒」，碰巧了順手抽你幾棍，那管你頭傷或手傷。三伏天在廠裡把人熱個死，手把着機器勝過火燙。到了那九九寒天日，直凍得人脚爛和手僵。在廠時兩眼死釘着那錠子突突的轉，到晚來出廠時兩眼茫茫。回到工房裡躺在地，這一股子疲勞勁兒委實難當：手腿痠疼毫無氣力，脖頸兒發僵怎敢把頭仰。凌冰塊似的被子拖來蓋在身上，直壓得血脉不得舒暢。夜裡既然歇不夠，來日還得把工上。吃的是黃窩窩和棒子麵，誰曾見過魚肉和酒漿。似這般睡不安來吃不飽，壓根兒就没穿過一件好衣裳；雖是終朝每日紡線並織布，織布的人兒沒有布補褲襠。條條線都透着斑斑血點，疋疋布嗅着都有人肉香；俺們的血和肉做成的線和布，給那東洋財主一咕嚕兒搬上了市場。在市場上擠跑了賣土布的鄉下老，滾滾的大洋錢都往東洋財主口袋里淌，填滿了鬼子的銀箱並銀櫃，裝在那火輪船上運往東洋，在東洋造成那洋貨洋槍洋礮，再運到中國來打俺的人、佔俺的城，還要搶走俺的大洋。

華光忽受這千般的苦楚，實指望靠着自己的力氣掙幾塊大洋，捎回家去，換點雜糧，奉養老娘，並把妻兒養。沒料想鬼子怎的太無良！鎮日裡作工不把工錢來發放。眼巴巴的

指望着開支的日子來到了，罰工、賠償、七折、八扣任他盤剝、任他賜賞；那管賬的鬼子渾似活閻王，怎容你分說、容你自度量。分明做够了一個月的工，却硬說只有二十五天把人誑。想要和他算一算，却向何處把理講！一月掙了大洋八塊，做了一整年的牛馬還沒有拿到一百塊大洋。每月扣去了房錢三塊整，連吃帶喝花了個溜躑精光。沒料想鬼子越來越兇橫，沒來由要把房錢漲，想要搬去另找地方住，他只把腦袋來晃一晃，任你落淚並下跪，也不和你通商量。賣雜麵的老哥也會湊熱鬧，他也把那吃喝的價來漲；問他「怎的這般不行好也把窮漢欺負」，他言說「多只為東洋鬼子收買糧食百物飛漲」。似這般辛辛苦苦從朝勞到夜，却還混不到個自己肚裡飽，那還有錢把家養。華光越思越想著急，不由得怒火燒胸膛。工房裡衆夥伴鬧開嚷嚷，都是爲着此事把話來講。這個說「他奶奶的快要活不了」，那個說「不加工錢我臊他的娘」！王大方說：「俺們得要求廠主加工資」，劉黑牛說：「咱們也得和鬼子把理講」。你一言來我一語，大夥兒齊心聲勢皇皇；推代表等天明要把廠主見，先舉出的是李大海和王大方，再推出了張二遼與孟金，更舉那老鍾也把代表當。大夥兒又把條件來商定，不達目的誓不把工上：第一條是「要求把工資加」，第二條是「不許打罵工人應該把理講」，三四兩條是「要求減少工作時間」「規定休息日」，第五條是「不准把房錢漲」。條條件說得對，不由得大夥兒齊聲歡呼聲震屋樑。且慢說這裡衆工人把事來計議，那邊廂早驚動了工頭、監工和稽查衆奸黨；他們聽得工房裡的暗探說了一遍，又派精細的探子去聽了個的當，連忙向廠主打了報告，只慌得一群鬼子踉踉跄跄：這幾個忙着去打電報，那些個忙着去關閉工廠，把廠門只關得嚴嚴緊緊，調來的海軍陸戰隊守定了圍

牆。鬼子們真個是眼尖手又快，沒等天明早就安排停當；他這裡安排下了牢籠巧計，單等那衆工人來自投羅網。

忽聽得遠處的金雞報了曉，衆工人齊齊整整出了工房，五位代表在前面走，只見那鬼子兵排列在兩旁；鬼子兵都戴着紅圈兒帽、穿着渾身的黃。衆人一見着了慌，這事兒看着有些不的當。張二遼說「這是那兒走了風」？李大海說「沒料想他竟設了防」！孟金開言把老鍾叫：「咱們大夥兒往裡闖」！只聽得鐵門裡面有人問：「誰是代表？報了姓名往裡放」！衆代表道罷姓名門開放，進門來只見廠主怒容滿面立在那廂。沒等得代表開口把話語，却早見廠主高聲嚷：「你等鼓動衆人來搗亂，妄想造反破壞工廠」；吩咐左右忙動手，兩旁邊早走來了稽查監工衆奸黨；兩個人猛上前來擒住一個代表，好一似餓虎撲綿羊。不由分說網了走，只聽得門外面刀聲鏘鏘、一片哭號叫嚷。皮鞭子濺水把代表來排，直打得衆代表渾身是傷。華光被打得暈了過去，猛然間又覺得遍體生涼，慢慢睜開了昏花眼，却見自身躺在那囚車的中央，渾身水淋淋的好似落湯鷄，李大海他四人躺在那兩旁。孟金低聲把老鍾喚：『什麼東西壓住了我這胸膛，眼見你我不濟了，但不知衆伙伴却在那方』？言談之間囚車停住了，走上來的幾個鬼子惡如虎狼，把華光連衆人擒了下去，拖拖拉拉到公堂，『說是亂黨，理應遭殃送監房；等着工潮平息、監禁期滿後，再辦一角公文，押戒還鄉』。

華光躺在牢獄裡眼望着鐵窗，想起了老娘：『這兇信若是傳到家鄉，豈不要望穿了老娘的眼，哭斷了妻兒的腸』。又想到：「爲了大家把外國的廠主來反抗，縱然身死又何傷？」說罷了工人痛苦一個小段，不由人痛淚交流怒滿胸膛！

⑦ 打 虎

霍亂殺人最狠，年年死傷如麻；一名還叫

虎咧拉，說起真真可怕！病發又嘔又吐，肚

疼甚似刀扎；口唇青紫眼窩窪，生命等時作罷！

列位：你道這首西江月，是爲什麼作的呢？原來霍亂一名虎咧拉，是一種最利害的傳染病。每年在夏秋之季，是這種病最流行的時候，死人計其數。只因我們中國科學不發達，窮鄉鄙壤的村民，在病未來的時候，既不懂得預防，病來了，只好燒香拜佛，再不然請上一位似通不通的中醫，胡亂弄點草根樹皮給你吃。這樣不知道坑死了多少人命！列位要知道：霍亂病雖然利害，我們儘有好多預防的方法，叫牠不能發生，請聽在下慢慢道來：

說的是祁州城外王家莊，
有一家大戶本姓王。
王大戶從前當過鄉長，
他的名子叫做王有常。
這村裏十個人倒有九個不識字，
就是有常上過學堂。
這一天王有常正在家裏坐，
忽聽得隔壁張仁家裏鬧嚷嚷。
又聽得哭一陣來叫一陣，
又喊爹來又喊娘。
王有常越聽越納悶，
不由得來到張家問其詳。
原來是張仁的兒子小三得了病，
張仁夫妻守在房。
張仁起身忙讓坐，
叫聲大哥王有常：
「這孩子身體本來好，
想不到今天病在牀。」
張仁有常正在一邊來講話，
那小三不住哼咳叫親娘。
有常舉目留神看，
見小三倆眼窪陷臉焦黃。
一會兒吐來一會兒瀉，
吐的像水瀉的像淘米湯。
小三說：「陣陣肚疼像刀子絞，
外帶着腿筋抽的慌。」

張仁說：「我去東莊取付藥」，
他老婆說：「不如到瘟神廟裏去燒香。
瘟神爺向來很靈驗，
燒香總比吃藥強。」
有常聞聽開言道：
叫聲老弟聽端詳：

王有常知道小三得的是霍亂病，燒香拜佛豈不是胡鬧？他趕緊和張仁說：「老弟小三得的這種病叫霍亂，也叫虎咧拉，是一種很利害的傳染病；燒香不管事，還是趕快請一位高明大夫吃點藥吧。」王有常知道霍亂很容易傳染，他說完這幾句話，趕快回家了。

且不說有常回家轉，
再把張仁表一番：
眼看小三病越重，
咳聲嘆氣坐立不安。
開言又把賢妻叫，
叫聲賢妻你聽言：
「有常哥說的話未必靠的住，
什麼虎咧拉能傳染我不以爲然。
還是到瘟神廟燒香上供，
求瘟神慈悲保佑咱。」
張仁的老婆不怠慢，
拿起香紙一溜烟。
三步併成兩步走，
瘟神廟不遠在面前。
先上供來後燒紙，
將身跪在供桌前。
口稱：「瘟神多保佑，
保佑小三多平安。」
禱告完畢忙站起，
急急忙忙轉回家園。
小三的病不但不見好，
陣陣昏迷把白眼翻。
張仁說：「我去東莊把趙先生請，
他的醫道亞賽神仙。」
他老婆聞聽連連說「好，
你務要快去快回還。」

張仁聞聽不怠慢，
 穿上大褂一溜烟。
 到東莊不過一里地，
 不多一會兒已回還。
 懷中掏出一包藥，
 又叫賢妻你聽言：
 「趙先生說這藥止吐又止瀉，
 藥到病除似仙丹。」
 他老婆倒了半碗白開水，
 扶持小三把藥餐。
 小三勉強把藥吃下肚，
 張仁夫妻真喜歡。
 都以爲小三得了救，
 誰想不到半夜小三一命完。

列位！霍亂這種病，雖然十分利害，可也不是凡得這種病的都要死。小三的病最初並不甚利害，他所以死的原因，第一是吃了他爹媽迷信的虧；他們如果不主張燒香，早先請一位高明的大夫，瞧一瞧也不至於死了。第二是吃了那位趙先生的虧；原來得霍亂的，吃了止吐止瀉的藥，是萬分危險的啊！

小三死後，張仁夫妻自然十分悲痛，這且不提；再說霍亂本是傳染病，王家莊所有的人們，除了王有常以外，沒有一個人懂得預防的；所以自從小三死後，得霍亂病的一天一天的多了起來。

自從小三一命喪了身，
 王家莊每天有病人。
 得的病都和小三是一樣，
 吐瀉肚疼腿抽筋。
 舌乾口渴小便不順，
 手脚冰涼汗滿身。
 不思食來不思飲，
 通身無力頭發昏。
 十個病人倒有九個死，
 十家準有九家有病人。
 今天才埋了老張和老李，
 明天又死了老鄭和老孫。

人家說霍亂殺人兇似虎，
 看起來他比老虎兇十分。
 王家莊家家戶戶有的得病有的死，
 就是那王有常家裏沒有病人。
 衆明公要問這是怎麼回事？
 聽我從頭說原因：
 王有常自從那天看見小三得了病，
 急急忙忙家回門。
 他見了他的太太開言道，
 叫聲太太你聽真：
 「咱村裏發現了霍亂病，
 又吐又瀉腿抽筋。
 這霍亂本來容易傳染，
 從今天我們要特別留神。

霍亂病雖然利害預防仍然有辦法，
 預防周到病不能侵。
 倘若是不留心得了霍亂，
 這種病說起來危險萬分。
 只要得了這種病，
 十有八九命難存。
 自己死了還不算，
 更能傳染全家的人。
 太太呀你看利害不利害，
 這可不能不小心。」
 王太太聞聽害了怕，
 開言有語把話云：

當時她問她丈夫說：「預防霍亂的傳染，究竟有什麼法子呢？」有常回頭對他的女兒秀娟說：「去叫你哥哥和你嫂子到這屋裏來，我給你們講一講預防霍亂的法子。」不一會，秀娟和她哥哥占元，她嫂子吳氏，都到上房屋裏來了。

頭裏進來了王占元，
 後面緊跟王秀娟，
 媳婦吳氏脚小走得慢，
 緊扭緊搖還落在後邊。
 大家進屋都落了坐，
 有常開口把話言：
 「咱村裏發現了霍亂病，

這件事情非等閑。
霍亂是一種很利害的傳染病，
說死只在一半天。
病發大吐又大瀉，
腹疼陣陣似刀剗。
小腿抽筋更難受，
頭昏口渴舌發乾。
張家小三得了這種病，
我們要設法預防才安全。
占元說：「霍亂怎麼傳來怎麼染？
請爹爹詳細說一番！」
有常說：「傳染霍亂全憑霍亂菌，
這種菌顯微鏡下才看得見。
病人的大便裏邊都有菌，
還有許多菌藏在食物上邊。
病人的糞便隨便倒，
蒼蠅一見來得歡。
東西越髒他越愛，
成群結隊落在上邊。
大吃大喝多一會，
許多病菌身上黏。
帶着病菌滿處飛散，
有的就飛進人家廚房間。
廚房裏吃喝東西外邊放，
這一羣勾魂鬼又來解饑，
吃喝東西都讓蒼蠅爬一遍，
留下了不少的病菌在上邊。
吃東西的人既不留神，
連東西帶病菌一塊吃到肚裏邊。
肚裏邊有了霍亂菌，
病發只在三兩天。
十人得病九人死，
任憑你身體強壯也枉然。
你們看霍亂可怕不可怕？
霍亂菌實在是得病大根源。
說完一件又一件，
聽我細細說一番：
有的人往常河裏倒馬桶，
霍亂病因此更往別處傳。

只因爲許多人家用河水，
誰想到病菌也就在其間。
這一來吃了河水得霍亂，
和蒼蠅傳播病菌是一般。
還有一點要注意，
聽我細細說一番：
霍亂菌不只是病人的糞便裏有，
他還在病人的衣服被褥上邊。
你要把病人的衣服被褥摸一下，
碰巧就有幾個病菌手上邊，
吃東西以前再不洗手，
那病菌也能到腸胃裏邊。
所以說只要發現了霍亂，
我們要處處留神才安全。」
王有常說罷這段話，
一旁吓壞王占元。
口中連把爹爹叫，
叫聲爹爹你聽言：
預防霍亂怎麼辦？
還望爹爹說一番。
有常聞聽開言道：
「預防方法並不難。
第一要注意病人的吐瀉物，
刨個坑埋在地裡邊。
其次是一切食物好好煮。
生冷不熟的東西不要餐，
吃飯的傢具常消毒，
這樣便可防病源。」
王太太說消毒又是怎麼回事，
請你細細講一番。
有常說：「消毒就是弄死病菌，
方法說來很簡單。
鄉下難買消毒的藥，
燒點開水並不難。
病菌遇見開水就被燙死。
自然不能把病傳。」
有常把消滅病菌的方法已經說過，
再把那斷絕傳染的方法說一番：
「蒼蠅既是勾魂鬼，

所以然防備蒼蠅最爲先。
 吃喝的東西上罩上紗罩，
 廚房裏再把紗窗按。
 見了蒼蠅就打死，
 免得他來把病傳。
 大街上切開的西瓜要不買，
 不乾淨的食物更不要餐。
 喝冷水尤其不保險，
 煮開了再喝放心寬。
 飯前便後都要洗手，
 怕的是霍亂病菌手上黏。
 我們的手要跟病人碰一碰，
 洗手消毒最當先。
 總而言之——句話，
 處處清潔處處小心保平安。」
 王有常說罷這些話，
 一家大小心裏豁然。
 占元又把母親叫：

「尊聲母親你聽言。
 今後咱一家都照父親所說的做，
 霍亂再利害也找尋不着咱。
 人家說霍亂好比一羣虎，
 咱們是打虎的英雄齊上前。」
 且不說有常家裏防霍亂，
 再把別家表一番。
 小三死後不到一禮拜，
 他媽也一命歸陰間。
 這一回死的人連連不斷，
 王家莊的哭聲似天翻。
 家家的孩子都穿着孝，
 家家的地裏把新墳添。
 全村裏十有八九都遭了難，
 就是那王有常的家裏都平安。
 這段故事已完結，
 勸明公千萬莫作等閑觀！

⑧ 守江陰 北平腔〔小口大鼓〕

（西江月）孤樹不能成林，萬事必須同心；「二人合力可斷金」，古語真是名論。

（白）幾句殘詞念罷，却說明末清兵入關以後，統兵攻打江南，一路勝利無阻，只是到了江陰，却彼江陰典史閻應元擋住，不能前進。這江陰乃是一個小小城池，方圍不過十餘里，人民不過萬戶，兵丁只有一千，只是因爲全縣人民同心合力，所以能擋住清兵十萬，把守三月之久，要知詳細，聽在慢慢道來：——

（唱）清兵入關佔中原，分派大兵平江南。那豫王多鐸是個勇將，帶兵南下破竹一般，各地官吏有降有跑，那不降的官民都死在陣前。一月間平定了一百多縣，攻破金陵也只用了兩天，殺人如麻尸骨遍地，鮮血橫流江河一般。那豫王多鐸揚揚得意，他心想平定江南似手翻，這一日，派降將劉良佐攻打江陰縣，那良佐他認識江陰典史閻應元，閻應元本是文官一個，自己並無領兵權，城內空空無兵守，只應元一人

守着關。良佐想此去江陰不用費勁，曉以利害招降有何難！兵到江陰安下營寨，劉良佐住在栖霞觀，忙派王恩到城裏去，前去招降閻應元。那王恩一行來到城門上，不料想兩扇城門關了個嚴，城上的守兵齊齊整整，一個個刀出鞘來弓上着弦。王恩不敢向前進，高聲大叫有話言。「我奉總兵劉老爺的命，城內來見閻應元。」守城的民軍沖沖怒，齊說道：「你不該投降賊人作漢奸，還有什麼臉面來見閻元帥，閻元帥決不和你這奸賊來攀談。你快快給我滾回去，若遲延管叫你命喪黃泉。」說話之間抽弓搭箭，嗖的一聲射中他的耳朵邊。只吓得王恩吱喀一聲回頭跑，耳帶鸚鵡奔向栖霞觀。他見了劉良佐便開言道，這回險些喪黃泉。那劉良佐一看說「且慢！無用的奴才你怎會這般，有什麼言語你且講，爲什麼耳插鸚鵡狼狽不堪，莫不是應元不降將你打，快快從頭說根源。」王恩連忙開言道：「劉老爺請容我細稟一番，小人

我奉命到江陰縣，萬不想城門緊閉兵容森嚴，閻應元被舉爲元帥，帶領着民軍守城垣，不肯投降也不把小人見，令軍民罵我們全是漢奸，不讓小人進城去，抽出了鵬翎扣上弦，只聽見嗖的一聲響，一支鵬翎把我的耳朵穿，小人我連忙往回跑，若再慢一點我命就要喪黃泉。」良佐說：「你這奴才真沒用，待本帥親自去見閻應元。他連忙叫從人備上戰馬，帶領着親兵來到城前，那親兵高叫城上衆軍士，劉老爺親自來到城關，速速去稟閻元帥，你就說故人來到有話言。」且不言傳話軍士把城下，那良佐站在城外仔細觀，又只見城上民軍十分齊整，一個個刀出鞘來弓上弦，大砲都是口向着外，滾木礮石擺得齊全。少刻就見那應元來到，昂然站在敵樓前，說城下來人是那個？要見某家有何話言，良佐聞聽開言道：「老朋友劉良佐要和你談，明朝已亡江南無主，你若歸順富貴無邊。你看那豫王多英勇，若是不降死在眼前。」閻應元聞聽哈哈大笑，「將軍真是亂胡言，想人民納糧養軍隊，原本爲保護人民得平安，不想你不顧廉恥降賊寇，你還敢前來作漢奸，我江陰人民都是義士，我們同心合力要把敵殲，你若是知羞快快退去，便是那多鐸親到我也要和他殺一番」。那良佐大怒回馬就走，閻應元下城忙把令傳：「清兵不久來攻打，必須要緊緊守城垣，城裏糧食和軍器，件件都須備齊全」，傳令已畢不多久，家家戶戶都來認捐，有的捐錢有的送米，也有的捐贈衣服和食鹽，銀錢捐了一千萬，一萬石糧食堆如山。武舉黃略把東門守，義民李玉守南關，那把守西門的是陳明選，把守北門的是閻應元，每門上大砲三十架，火藥三缸還有鉛丸，許用德巡查四門打接應，婦女們造飯供軍餐。安擺才罷清兵已到，十萬大兵來到濠邊，營盤紮下一百多座，大砲攻城烟火連天。城牆北面打了一個洞，各家忙摘下門板用鐵練穿，又用棺材裝滿了土，堆到城根把窟窿填，婦女小孩齊下手，有的擡土有的搬磚。一夜的工夫便堆起，城牆弄得分外堅，清兵攻打三晝

夜，城牆還是鐵一般。那多鐸一見心急燥，氣得白眼不住的翻。又調精兵齊射箭，火炮雲梯向上鑽，城上弓多只缺箭，急壞了英雄閻應元，他低頭不語來回走，忽然間想起了一個巧機關，這一天時候剛剛到夜，陰雲密佈黑暗暗，他捆好草人五百個，挂上紅燈立在垛口邊，城內民軍擂鼓吶喊，彷彿要下城去劫營盤。清兵一見駭了怕，個個吓的稀屎窟，少時燈滅鼓聲也住，只是一片陰沉沉的天。清兵才把心放下，燈又明來鼓又喧，又好像下城來劫寨，那豫王多鐸怒髮冲冠，他說道：「連忙吩咐弓箭手，快將箭矢上弓弦，管他劫寨不劫寨，只管放箭莫遲延」。只聽嗖嗖的往城上射，從三更一直放到四更天。紅燈已滅鼓聲住，個個草人滿被箭穿，城中得了清兵箭，十萬鵬翎沒花一文錢。天明烏雲全四散，一輪旭日照旗旛，風飄着大旗忽忽響，旗上邊寫着「同心合力」四個大字斗一般，民軍站在垛口上，高聲對清兵把話言，「多謝贈送十萬箭，兩軍陣前再送還」。只氣得清兵無可奈，怒目橫眉咬牙關。又過幾天城中又吶喊，清兵還以爲是計忙把營門關，不想這次是真來劫寨，攻進了營門即刻退還，只鬧得清兵自己相殺砍，一夜死了好幾千。那多鐸無辦法行苦肉計，綁着兩個降將跪在城前。「哀告江陰衆父老，快收兵來快開關，若是不降我們定被斬，萬望父老把我們可憐。」民軍在城上忙答話：「罵聲奴才不知羞慚，你既被擒早就該死，忝不知恥還來求憐，誰能憐惜你們無能之輩，誰可憐你們倆個漢奸，」話言之間搭上箭，兩箭把他們射倒在地平川，一個射仲天靈蓋，一個射在胸膛前。跟隨的兵卒往回跑，見了多鐸稟報一番，豫王多鐸冲怒，架起大砲攻城垣，一連攻打十天整，攻打不開還是枉然。民軍一千擋敵十萬，小小江陰守了八十八天。這都是人人齊心勢力大，共同努力事事可成全。到後來城裏糧草盡，衆民兵爲國死難美名傳。唱罷了守江陰一個小段，望諸位合力救國莫作等閒。

⑨ 吳起

他能愛護士卒，與他們共甘苦，所以能打勝仗。

距今二千多年，東周列國時候，河南地方（那時候叫衛國）有一個人，名叫吳起，這人生得身體壯健，天資聰穎，只是從小就不愛唸書，光喜歡耍耍寶劍，弄弄刀槍。有一天他的母親責罵他道：「你這麼大了，還是終日遊蕩，不務正業，將來如何是好？」吳起聽了母親的話，便一賭氣出了門，遠訪名師就讀。先在曾子門下讀了幾年書，後來又棄文學武，專攻兵法，因為他十分聰明，所以不到幾年，孫武子兵法，司馬穰苴兵法，都被他研究得精通。學成之後，便求仕於魯，魯穆公拜他為大夫。

不久，齊將田和，引兵來攻魯國。魯穆公原想用吳起為將，出抗齊師，但因吳起娶於齊國田氏，怕他到了前線，顧念親戚情份，不肯認真作戰。吳起是何等聰明乖覺的人，穆公這心思早被他看透了。他便殺了妻子，拿了那田氏的頭來見穆公，請穆公不要再懷疑他，任用他為大將。穆公曉得他為人精通兵法，又多智謀，便拜他為大將，領兵與齊相抗。

吳起受命，統率十萬大軍，調赴前線，準備與齊作戰。不到兩天工夫，他們便來到魯國邊境。兵士們搭了營帳，築起爐竈，在那兒駐紮了起來。

他們駐紮的地方，是一片漠漠的荒野。兵士們在近處鄉下人家裡，尋了些稻草來，舖在地上，夜裡，便睡在那上面。吳起夜間也睡在稻草上，並不另設舖位。他的侍衛和他說：「將軍玉體貴重，不能如此。」他搖搖頭微笑着毫不在意的說道：「將軍和兵士有什麼不同？別的弟兄能受苦，我吳起為什麼不能？」吃飯的時候，他也和兵士們一樣，坐在飯鍋旁邊，端着黑皮子大碗，往嘴裡扒撈米飯，咬鹹菜頭和鹽漬的白菜幫子；一邊吃，一邊和兵士們談笑，

毫不擺長官架子。

有一次行軍，他看見前面有一個老兵，揹負着沉重的米糧袋，彎着身子，一邊走，一邊喘息，頭上滴滴嗒嗒直掉汗珠。他便走上前去，拍了一下那兵士的肩膀道：「老弟兄！我替你揹點罷！」那兵士正在低頭走路，肩上猛然被他拍了一巴掌，不覺吃了一驚。一回頭見是吳將軍，便囁囁着說：「小兵……不敢勞動……。」吳起溫和的笑着道：「你一個人，揹這麼些個東西，太吃力了。分給我點兒吧！」說着，就從那兵士肩膀頭上，扯下一條米糧袋來，放在自己肩上。那兵士待要去搶，吳起早已急步走向前去了。別的兵士看見了，都指着那個老兵罵道：「你這個該死的懶傢伙，怎麼叫將軍替你揹起東西來了！」吳起聽了連忙回過頭來，搖頭制止他們說：「你們不要如此，他一人揹那麼多，實在太累了，我看着他，兩手空空的走路，實在不忍心。如今我替他分揹一點，算不得什麼。」那些兵士聽了，都為之動容，齊聲讚嘆道：「將軍！你待我們太好了！」

有一次，營中有一個兵，背上生了瘡，躺在營帳中，晝夜大睜着無神的兩眼，張着乾焦的嘴唇直哼哼。吳起夜間醒來，聽了那悽慘的呻吟聲，再也不能接着往下睡了，便爬了起來，披上衣裳，走到那患病的兵士前面，想撫慰撫慰他。問知他今晚還未曾服藥，便親自打開藥包。在一座小泥爐上，為他將藥煎好；倒在碗裡，放在唇邊，親自試了一下涼熱，然後又捧到那兵士面前。那兵士已朦朧睡去，吳起便輕輕將他拍醒，柔聲的向他道：「藥好了，吃罷！」他那溫存體貼，竟像一位慈愛的母親。

後來，吳起聽人說，那瘡如果破了，流出膿血來就好了，他就扶起那兵士，叫他和自己背臉坐着，自己俯身下去，吸吮那瘡裡的膿血。那瘡本來已潰爛了多日，腥臭難聞。上面落了好些蒼蠅，揮也揮不去，剛用手闕走了，又飛

攏來了。吳起的臉才一貼近那瘡口，那一種惡臭氣味，攢進了他的鼻孔，使他險些嘔吐出來；但他隱忍着，屏止了呼吸，將嘴唇緊吻着那紅腫流膿的瘡口，用力的一吸，一股稀湯似的膿汁，沾上他舌頭，流入他口中，又腥又臭，又鹹又苦，說不清是什麼滋味。吸了一口，吐在地上，再接再又去吮吮，一連吸了十多口，那凸起的瘡，竟平下去了。他便叫那兵士重又躺好，爲他蓋好被子，安慰他說：「安心的睡一會兒吧，不久你就可以好了。」那兵士望着他，大顆的眼淚，從眼角流下來，用微弱的聲音說道：「將軍！你比我親生父母還好呢！」全軍士卒，見了這情狀，莫不感泣，個個磨拳擦掌，願爲將軍效死。

齊國田和，聽說魯軍將領是吳起，十分輕蔑的說道：「吳起有什麼能耐呢？能與我田和較量嗎？」

過了幾天，不見魯軍前來挑戰，便派了探子，前去偵察魯軍動靜。那探子去了半日，回來報道：「我看見吳起坐在帳中拿了一個大空碗，和一個小兵分一碗肉湯哩。」

田和聽了拍掌哈哈大笑說道：「將軍尊嚴，兵士才會生畏心，兵士生畏心，才不敢不出力作戰。吳起這樣對待兵士，和兵士們在一起廝混，怎能叫兵士怕他？既兵士不怕他，怎肯爲他出力作戰？我不用擔心了，他決定不會打勝了我的。」第二日，便派了愛將張丑，到吳起帳中去探聽戰守之意。

吳起這日正和士兵們盤膝坐在一起，談一些名將的故事呢；忽聽守門的兵進來報道：「齊國的將官張丑求見將軍。」吳起便叫那些精壯的兵丁藏在一邊，只叫那些老弱駝背灣腰的老兵，和那些年少的兵娃子留在外面。安排已畢，便吩咐一聲：「請！」

張丑一進來，見滿營都是些長了鬚鬍的老兵，和些年輕的小兵，心裡就有幾分輕視之意，暗想道：「吳起的兵，原來都是這麼一些不中用的。」進入帳中見了吳起，分賓主之禮坐下，互相說了「欽佩……久仰……」一類的客氣

話。略停片刻，張丑啜了一口茶，緩緩說道：「將軍的夫人，是齊國田宗的小姐，將軍如果不忘田氏之好，我們那方面，願與將軍結盟講和，從此休戰。」

吳起轉動着眼睛，打量了一下張丑，心裡暗暗發笑想道：「你這片鬼話還瞞的過我？」他心裡雖這樣想，但外表仍裝成相信他的話的模樣，微笑着欠身答道：「我一個書生，那裡敢與貴國交戰，兩國如能結盟通好，從此停戰，那乃是我渴望之事。」

吳起留張丑於營中，歡飲了三日，絕口不談軍旅之事，張丑偶爾談到，他也偽裝糊塗，不與接談。

張丑臨行，吳起還裝出極端誠懇的樣子說：「我一心一意盼望雙方能够結盟通好，我拜託您千萬回去早日促成這事的實現。」

張丑走了不多時候，吳起便將軍隊編排成三路，東路命泄柳統率，西路命申詳統率，中央一路軍由自己帶領，尾隨在張丑後面。

張丑回去正在那裡和田和談得高興，說吳起人怎樣的愚蠢，兵怎樣的無用……，忽聽得轅門外鼓聲大作，殺聲震天，原來是吳起領着兵殺了進來。嚇得田和，馬不及乘，車不及駕，叫一個侍從揹着，從後門逃出去了。田和軍中大亂，田忌，段朋急忙整頓軍士迎戰，不隄防泄柳又領了一枝兵從左闖入，右邊又閃出了申詳一枝兵。魯軍三路並進，將齊軍圍在中央。齊軍大敗，橫尸遍野，血流成河。

魯軍走後，田和罵張丑道：「你這個不中用的東西，都是你誤的事！」

張丑面紅耳赤，十分羞愧的答道：「誰想到吳起對我的那一套全是假的呢？」

田和嘆道：「吳起用兵，是孫武穰苴之流，魯國如果長久任用他，齊人將沒有安穩日子過了。」

吳起這次建立了奇功，穆公大悅。備辦牛酒金錢，大犒三軍，並拜吳起爲上卿，很見愛重。

他在魯國，本來很可有一番作爲的，可惜

後來中了齊國的反間之計，魯穆公想撤他的職，懲辦他，但命令未下，吳起便已聞訊，偷偷逃掉了。

後來他奔到魏國，在魏國建立了不少功勳。魏文侯死後，他的兒子即位，是爲武侯，吳起覺着是前朝的功臣，滿想做一任好宰相，誰知却把宰相給了一個老臣田文。他十分氣憤，武侯也十分不高興他，打算削他的官職，他便棄魏奔楚。

到了楚國，楚悼王很器重他，拜他爲相。吳起感恩無已，便慨然以富國強兵自任，他向悼王建議道：

「楚國地方數千里，擁兵百餘萬，原很可以爲諸侯之雄，安爲盟主。目前所以不能那樣，都是因爲失了養兵之道的緣故。養兵之道，是使兵丁餉糧充足，然後再用他打仗，他才樂意爲國捐軀。現在滿朝都是領乾薪，掛空名，遊手好閑的貴族王孫，國家養着這般無用的人，

虛耗國家的錢財，而戰士的餉銀，只有升斗之微。國家待他們如此之薄，而希望他們替國家捐軀，那裡能够呢。楚國不想富強便罷，要想富強，第一非得裁去那些無用官員，節省出金錢來給那些戰士們不可。」楚王很以爲然，便採納了他這建議。

吳起這辦法一實行，王孫貴族失祿的有數百家，但國家一年竟節省下一百多萬。他又召集士卒，朝夕操練，戰術特別好的，餉銀特別加厚。不上幾年，楚國兵強國富，雄視天下。三晉，齊，秦，對楚都十分畏懼，終悼王之世，不敢加兵於楚。

吳起這個人治軍是良將，治國是能臣。他的殺妻求將，歷事數國，自然毫無足取；可是他的治軍方法，謀國計劃，我們不能抹煞。尤其是他的視士兵如手足，把民衆當同胞這一點，是值得我們效法，值得我們佩服的！

⑩ 對內和平統一，對外一致抗戰

學校裏放了寒假，做教員的王國幹，爲了多得些教育農民的機會，仍舊留在學校裏，並未回家。青年農民劉萬富和李永年，在這時候，也有了很的空閒時間，因此在白天裏，也常常到學校裏來，向王國幹請教。

今天是二月十五，也正是舊歷的正月初五，永年和萬富，吃完了早飯，興沖沖的跑到學校裏來。「二位！今天幹嗎來得這麼早？有什麼重要問題跟我討論嗎？」國幹讓他倆坐下以後，笑吟吟的這樣問着。永年說：「是的！今天是二月十五啦，正是三中全會開幕的時候，我們都知道這次的三中全會，對於中國的前途是很重要的。但是三中全會究竟都是由什麼人來出席，他們權力有多大？這些還有點兒摸不着頭腦，還請先生指示一番。」國幹說：

「好！聽我慢慢的道來：

國幹帶笑把話言，

尊二位，聽我從頭講一番，
首先提到國民黨，
這些年來執掌政權。
全國黨員選代表，
組成了全大會最高機關；
全國代表大會的權力大，
決定國策選舉中央委員；
中央委員組織成中央執行委員會，
全大會閉幕期間行使職權。
在平時推定常委行使職務，
隔幾月全體會議舉行一番。
大多數中央委員都到會，
關係重大非等閒。
全大會到現在已是五屆，
每屆裏中全會舉行幾番；
這一次舉行的三中全會，
就是那第五屆的第三番。
內政外交都要討論，

關係重大不同一般！」

國幹說到這里，萬富問道：「據你說來，中央全會真是重要極了，但是這幾年來，也曾經舉行過好多次的中央全會，爲什麼都好像不痛癢似的，引不起一般民衆的注意呢？爲什麼這一次的三中全會，每個人都眼巴巴的盼望它呢？」國幹說：

「已往種種會議被人看輕，
都只爲議而不決決而不行，
彷彿是有會無會無關輕重，
因此上把它當作耳旁風。」

國幹正要接着往下說的時候，永年插嘴問道：「那麼，你敢擔保這一次的會議，就能做到『議而能決，決而必行』的地步嗎？」國幹說：「三中全會的結果如何，在開幕的今日，自然不敢預測；就是能做到『議而能決，決而必行』的地步，也得看看議的是什麼，決的是什麼，行的是什麼，才能判斷它的價值，不過我們從最近國內國外的局勢看來，國難的嚴重，已經到了最後的關頭，全國人民一致的渴望對內和平統一，對外抗戰禦侮，因此對於有關內外大計的三中全會，都希望有個圓滿的結果，不像以往那樣漠不關心了。鐵的事實，擺在眼前，縱想迴避，也不可能。我們希望出席全會的中委，一方面積力矯正以往『議而不決，決而不行』的毛病，一方面要認清民衆的要求，抓住問題的要點，給中國一個起死回生的機會。」萬富說：「王先生，你說的對極啦！我家東隔壁有個叫蔡麻子的，他是一個不識字的老農，昨天很興奮的對我說：『聽說中國要抗×啦，這幾天南京開的什麼會議，就是商量這個事情的，啊！中國可有希望啦！』」王先生，你看！連鄉下的老百姓也注意起三中全會來啦！這是從先所沒有的現象啊！」國幹說：「這現象真是好極啦！可是一般老百姓們，對於三中全會究竟抱着甚麼希望呢？」萬富說：「我們老百姓們所說的話，雖然沒有什麼條理，可是歸堆說起來，也不外兩方面：一個是澈底反對內戰，希望和平統一；一個是發動抗×戰爭，挽救民

族危亡。這兩件事，其實也就是一件事的兩方面，都希望在三中全會裏，得到一個圓滿的解決。」國幹說：「你所說的兩種希望，都是很正當的，就請你們把這兩種希望的理由，分別的說一下好不好？」萬富說：「好！我先說第一方面：

萬富叫聲王先生，
聽我把反對內戰的理由說個清：
十幾年來多內戰，
遍地槍砲響連聲，
衆軍閥只願爭權與奪利，
他把那國計民生就往一邊扔。
這處打來那處打，
今日戰來明日爭。
只落得黎民百姓不得安靜，
東奔西逃受苦辛。
只落得一見大兵就害怕，
聽說內戰就腦袋疼。
只落得帝國主義來侵略，
佔去了東北四省又把綏遠攻，
眼睜睜華北一帶難保守，
進一步佔領全國其勢洶洶。
要想免去亡國禍，
全國的力量要集中，
任何內戰都要避免，
澈底鞏固國內和平。
不當漢奸的都是同志，
全國結成一條繩，
完成統一集中力量，
一致對外息內爭。
那敵人希望我們自己打自己，
好讓他趁火打劫坐享其成。
我們自己要爭氣，
別叫敵人有隙乘。
近年來全國民衆都覺悟，
全主張槍口對外國內和平；
我政府也主張和平統一保存國力，
儘量避免國內戰爭。
因此上西南事變沒有擴大，

西安事變消滅無形。
看起來中國總算有希望，
真正的敵人已認清，
希望這一次的中全會，
進一步主張和平貫徹始終！」
萬富說完這番話，
國幹拍手讚連聲。
開言又把永年叫，
「你把那主張抗敵的理由明一明！」
永年說「這個理由容易講，
三歲孩子也認清！
敵人野心天來大，
得寸進尺不留情。
我們越是不抵抗，
他越發不把我們放在眼中。
不抵抗失去了東三省，
局部抵抗又把熱河扔，
近二年察北冀東非我有，
怕只怕半壁山河保不成！
五六年血的經驗應該猛醒，
那就是：『我越退讓越進攻！』
有人說：『要想抗敵須有準備，
要雪國恥莫求急功。』
這就是長期準備抗敵論，
實在叫人想不通！
須知道我們準備人家也準備，
敵人的準備效力更宏；
怕只怕不容我們準備好，
亡國的局面已造成。
看起來空喊準備不中用，
結果是竹竿打水落個空！
只有那一面抗戰一面準備。
這就是空喊口號不如實行！
又有人說：『我們的力量實在不夠，
人力物力都不行！』
這種人真是害了恐×病，
抹殺自己長人威風！
歷年來局部抗戰也會得勝，
最近的綏遠大戰也成功，

東三省義勇軍越來越勇，
那敵人千方百計也不成。
看起來中國人不是不中用，
那敵人也不是天將天兵！
打勝仗武器精良自然重要。
其他的許多條件也別看輕！
國際上那敵人陷於孤立，
敵國內種種矛盾潛伏無窮。
他本是侵略弱小出兵不正，
世界上多數人類不同情；
我本是抵抗侵略萬不得已，
衆同胞人人都要死裡求生。
縱然說我們不敢操必勝，
也比那坐以待亡好上幾層。
這些理由全不必講，
那許多中央委員都很聰明。
希望他能顧到民族生命，
只要認清全國民情，
會議席上主張抗戰，
全國動員把敵攻。
保障民權訓練民衆，
國民會議早開成。
完成了抗敵禦侮民族革命，
收復失地痛飲黃龍！
這才是爲國盡忠爲民請命，
千秋萬世留美名！」
永年說完一片話，
國幹點頭稱讚不停：
「你們的話很能代表多數民衆；
那就是對外抗戰對內和平。
黨國諸公見識遠，
一定能夠體察民情。
要知道三中全會有何結果，
再過幾天自然看清，
大家耐心且等待，
希望着撥開雲霧見光明！」
他三人說罷了三中全會一席話，
永年萬富回家行。

① 改良
大鼓 慈 母 淚 (一名槍斃毒犯)

迷離芳草暮春天，
一抹斜陽傍遠山；
牧童兒口橫短笛騎牛背，
吹得是漁樵耕讀四位大賢；
在荒郊外有一具屍身仰臥，
呀！你看那殷殷血水尚涓涓。
曾記得剛才這裏多麼熱鬧，
真個是人海又人山，
也有那老叟龍鍾扶着拐棍，
也有那小小玩童四處亂攪，
也有那年青婦女來湊趣，
也有那公子哥兒馬上加鞭。
說不盡士農工商軍民人等，
都來看槍斃毒犯叫候會南，
一霎時毒犯飲彈人盡散，
空留得一汪碧血照眼鮮。
正這時從後面跑來一位老婦女，
你看她皤然白髮已殘年，
顛巍巍一步一跌連聲叫喊，
說：「我的兒你怎死得這樣可憐？」
到跟前伏在屍身心肝痛碎，
不由得兩眼昏花老淚漣漣，
說：「小冤家你今一死無牽掛，
拋老娘桑榆晚景太孤單！
想當年你父去世你剛三歲，
剩我們孤兒寡母受盡貧寒；
真乃是伶仃孤苦無依靠，
全憑我鍼指勤勞去賺錢；
七歲八歲送你學堂把書念，
實指望長大成人裕後光前，
才不枉我節烈冰霜五十載，
在黃泉下你那短命的爹爹魂也安。
好容易盼到畢業娘心喜，
雖不能羊羹供養，也可以菽水承歡。
雖知你沒出息的孩子不長進，
交了些狐朋狗友酒地花天。

更不知你什麼時候抽上了白面，
那真是害人的東西毒藥一般！
幾次幾番勸你全然不睬，
你怎麼拿媽媽的好話當作爛言？
到後來厲行戒毒官家舉辦，
真乃是雷厲風行決不姑寬！
這時候你總應澈底覺醒，
作一個改過自新的好兒男。
可是你執迷不悟一錯百錯，
到後來被人舉發捉到當官，
在戒毒所裏把癮戒好，
又把那顯明的標記刺在肉間，
臨釋放苦苦叮嚀不可再犯，
再犯時捉將官裡不是玩！
難免那槍下作鬼法場死，
你說說這樣的結局冤不冤？
傻孩子你怎麼不知悔改，
剛戒好你又抽了一個歡，
真也是天網恢恢難脫漏，
也該你屍橫草地多麼悽慘，
我痛碎了心腸你不知道，
狠心把孤身的老母扔在一邊，
可憐我風燭殘年將誰靠？
兒呀！你等等我吧我就到你的跟前！」
這老婦人哀痛幾絕聲嘶力盡，
就是鐵石的人兒也心酸。
在一旁圍着些個閒人忙解勸，
說：「老太太不要哭啦！已經是日落西山。
死去的人兒哭到明天也沒有用，
誰教他自作自受命染黃泉？
好好的人兒偏偏不長進，
爲什麼與那些毒物結下不解緣？
那都是外國鬼子來把我們害，
弄了些金丹白面還有大煙，
染上了這些嗜好終身之累，
縱讓他有命活着也是玩完。」

那婦人半晌無言咳聲嘆氣，
 站起身淚眼頻揩才返家園。
 我弄筆編成慈母淚，
 也無非苦口婆心警愚頑，
 但只願嗜毒的同胞速覺悟，
 莫等待身入監牢後悔難，
 言不盡槍斃毒犯一段事，
 祝中華民族光大億萬斯年。

改良
 大鼓 白面客嘆五更

一更裏來月東升，
 白面客心中好不傷情！
 相當年飽食煖衣居富貴，
 父和母愛如珍珠掌上擎，
 也是我嬌生慣養不爭氣，
 交了些狗友與狐朋，
 逛班子捧姑娘常把牌打，
 學會了抽雅片不務正經，
 到後來學抽白面去過癮，
 那知道這種毒品害人不輕，
 似這般奢侈性成揮金加土，
 漸漸的把百萬家財一掃空，
 每日裏少吃無穿親朋白眼，
 犯烟癮精神頹靡骨節齊疼，
 染上了白面癮終身之累，
 這就叫自作自受把自己傾。
 二更裏來月輪高，
 白面客兩眼淚滔滔，
 思想起結髮妻年青美貌，
 真個是你恩我愛比漆膠，
 猶記得七夕穿針雙乞巧，
 猶記得中秋玩月慶良宵，
 猶記得携手而行玩春景，
 猶記得圍爐共話把寒消，
 實指望地久天長白頭到老，
 那想到釵分鏡破分道揚鏢？
 皆因我一念之差抽上白面，
 可憐他朝夕規勸舌敝唇焦，
 也是我生性下流不長進，

只落得長街乞討手端瓢。
 最傷心恩愛夫妻雙拆散，
 這就叫沒志氣的人兒沒下梢。
 三更裡來月正空，
 白面客擡頭望蒼穹，
 想人生百年剎那終須死，
 總應該成名立業不虛生，
 要學那五典三墳安家國，
 要學那六韜三略立勳功，
 要學那取義成仁真烈士，
 要學那捐軀報國大英雄，
 既不然也應當自食其力，
 決不該游手好閒坐吃山空，
 到如今白面成癮身瘦弱，
 不能夠辛苦勤勞去作工，
 真慚愧活到世間成廢物，
 似我這不生不死醉朦朧，
 看起來貴賤窮通都在自己，
 扎嗎啡抽白面誰得善終？
 四更裡月兒將落，
 白面客心酸淚如梭，
 恨只恨洋人設法將我害，
 製造毒物運到中國，
 鴉片嗎啡與白面，
 又有什麼金丹紅丸更缺德，
 只要你染成嗜好抽成癮，
 自然就蕩產傾家了不得！
 這明明是洋人害我用毒計，
 偏中他的圈套是爲何？
 每年間外來毒物傾銷無數，
 苦害了多少同胞受折磨！
 這真是明知大坑偏要跳，
 不長進的人兒實在難說，
 眼睜睜毒化日深漫天烟霧，
 真乃是自家作孽不可活。
 五更裏來月西沉，
 白面客輾轉暗傷神，
 我中華地大物博稱富庶，
 最可憐東北四省歸敵人，

每個人應該挺身去爭戰，
爲什麼還貪戀着大煙白面嗎啡針？
身成病夫風吹倒，
那能夠衝鋒陷陣殺敵人？
風聲鶴唳戰雲緊，
若再不發奮難生存！

但只願舉國同胞速覺醒！
下決心戒除嗜好作新民！
若能夠萬衆一心齊奮起，
又何患國家民族不翻身？
破工夫寫一段五更嘆，
無非是晨鐘暮鼓喚醒迷津！

**Publications of Tong-su-du-wu Bian-kan-she (通俗讀物編刊社,
Publishing House for Popular Literature) Edited collection**

Ogura, Yoshihiko

After the Japanese invasion of Manchuria which began from 1931, the famous, contemporary Chinese historian Gu Jie-gang (顧頡剛, 1893-1980) formed the Publishing House for Popular Literature, composed various works with an anti-Japanese theme using a form of peoples' literature, the *daguci* (大鼓詞), and published 600 kinds of pamphlets,

a total of 50,000,000 copies. This issue introduces eleven of these kinds, only a small portion of the originals which were provided by Gu Jie-gang's daughter, Gu Hong (顧洪).

The individual themes are summarized below:

① A patriotic incident in which a Shanghai taxi driver, Hu A-mao(胡阿毛), carrying three Japanese soldiers drove into a river, drowning all of them.

The pitiful condition of Korea as a Japanese colony.

The regret of Puyi (溥儀) who was tricked into becoming the emperor of Manchuria by the Japanese. (These three chapters compose one volume.)

② The resentment of Yao Rui-fang (姚瑞芳), a daughter of a respectable family in Shanghai, over Japan's invasion of Manchuria and her subsequent departure from home to join the volunteer army.

③ A short history of the Japanese invasion of China from the end of the 19th century through the 1930's.

④ The resistance of General Qi Ji-guang (戚繼光) and his men against the Wokou (倭寇, Japanese marauders) who laid waste to the southeast coast of China in the 16th century.

⑤ Song (宋) Dynasty General Wen Tian-xiang's (文天祥) continued resistance to the Mongol armies until his death.

⑥ An incident in which a farmer of Honan(河南) Province who lost his home in a flood went to work for a Japanese factory in Qing-dao (青島), but was beaten for requesting better treatment.

⑦ An incident in which many people died in a village where cholera broke out because of their ignorance of the causes of the disease leaving only the whole Wang(王) family surviving because they had thoroughly disinfected their food.

⑧ An incident in the mid 17th century where only the residents of the Jiang-yin (江陰) district all cooperated to hold out for 88 days against the large armies of the Qing(清) Dynasty.

⑨ General Wu Qi's (吳起) kind treatment of his soldiers and his subsequent victory using skillful strategy in 400 B. C.

⑩ A conversation between a teacher and two youths about the significance of the San-zhong-chuan-hui (三中全会) in February 1937.

⑪ The grief of an old mother for drug addicts who were executed under the law.

The regret of a drug addict who grieves for himself as a person maimed for life.

(These two chapters compose one volume.)